

令和2年度 Web 版「かけかわ教育の日」特別企画

「教師になってよかった」と 感じた瞬間エピソード集

「教師っていいな！！」「心がほっこりする！！」
教師という仕事のよさを、感じてみませんか。



令和3年1月 掛川市教育委員会



あなたの夢、描いたつづきは掛川で。

あいさつ



掛川市教育委員会

教育長 佐藤嘉晃

ここ数年、教員採用選考試験の受験者数が減ってきているという話題を耳にします。「教師」という道を選択するのをためらう若者が増えてきているのかもしれませんが。もちろん「教師」という仕事には苦しいこともたくさんあります。でもその苦しさを越える「喜び」や「やりがい」があるからこそ、先生方は教師として頑張り続けています。

掛川市では頑張る掛川の先生方から、「教師になってよかった」と感じた瞬間エピソードを集め、冊子としてまとめました。この「教師になってよかった。」と感じた瞬間エピソード集には、教師でしか味わうことのできない喜びがたくさんつまっています。

このエピソード集を読むことで、教師を志す若者の皆様が「教師として頑張る未来の自分」を思い描くきっかけとなることを願って、あいさつとさせていただきます。

「教師になってよかった」と感じた瞬間エピソード

目次

【子どもとの関わり編（小学校）】

- 1 教え子との再会
- 2 じわっと心にあたたかい灯火が残る、私の幸せなエピソード
- 3 「子どもの純粋な心が間近で感じられます！」
教師自身の心も癒やされる素敵な仕事です」
- 4 1年間の物語
- 5 寄せ書き
- 6 「教師になってよかった」
- 7 小さなエピソード
- 8 何故、まだ続けているのだろう
- 9 心からの笑顔
- 10 「魔法の言葉」
- 11 授業は「LIVE」
- 12 私の宝物
- 13 悩み相談
- 14 子どもの小さな笑顔にほっこりできる日常
- 15 思いもよらない言葉
- 16 小さな紙きれのメッセージ
- 17 再開
- 18 「1ヶ月前の僕5点。でもね、今は95点！」
- 19 最高な出会い
- 20 何気ない一言
- 21 ちょっとした一言から
- 22 小さな小さな「わかった！」と出会えた時
- 23 良さを見つける
- 24 大きくなったね
- 25 「もう1回見せて！」道徳の授業で
- 26 教師としての喜び
- 27 「ありがとうございました。」
- 28 最高の瞬間
- 29 やっぱり教師はいいな

- 30 教師になってよかった ～子どもからのあの一言～
- 31 子どもたちと会えること
- 32 ずっとつながっている
- 33 惚れ込んだ実践
- 34 買い物をしながら
- 35 教師の楽しさ
- 36 折りたたまれた1枚の紙
- 37 負けたけど楽しかった
- 38 「キラリ！ふれあいコンサート」
- 39 自分の願う姿をも超えた表れを見せる瞬間
- 40 力強い返事から感じた大きな成長
- 41 音読を通じて生まれる感動
- 42 教師の魅力を感じる瞬間

【子どもとの関わり編（中学校）】

- 43 先生ががんばらなきゃ
- 44 卒業アルバムのメッセージ
- 45 あの景色を見るために・・・
- 46 「ロックンソーランと法被」
- 47 日々成長していく生徒の姿を身近に感じられること
- 48 私が救われたひと言
- 49 「A子との出会い」
- 50 教師としての2020年
- 51 結婚式のメッセージ
- 52 掛川で、生徒の成長を
- 53 会えてよかった。
- 54 教師になってよかったこと
- 55 時間を共有し、思いを共有すること
- 56 感動を与えてくれた生徒たち
- 57 未来は今日の中にある
- 58 教師という仕事は本当に面白い
- 59 土台作りに関わることでできたと思えた時
- 60 「教師になってよかったと思う人間」
- 61 生徒からもらう言葉
- 62 私のエピソード

- 63 「養護教諭でよかった。」
- 64 「跳べた！」
- 65 「何で私たちがこんなこと言われなきゃいけないの」
- 66 この仕事でした得られない感動や悔しさ
- 67 「彼女の心の成長に涙が出た」
- 68 この職業のやりがい
- 69 「披露宴」
- 70 「ありがとうございます。」
- 71 やれることがあると証明できたこと
- 72 そうだ、感動しよう
- 73 共に考えるという愉しみ
- 74 卒業生との関わり
- 75 初めての体育大会
- 76 会話ができた
- 77 『本気だったからこそあふれた思い』

【先輩・同僚教師との関わり編】

- 78 子どももかわいいですが・・・。
- 79 教務主任の後押し
- 80 先生方との出会い
- 81 きっといいこと・・・あります
- 82 仕事を通しての繋がり

【保護者との関わり編】

- 83 夏の面談で
- 84 思いが届いたと感じた時
- 85 小さな変化を感じる喜び
- 86 本読みカードの言葉
- 87 1つ1つの出会いに感謝
- 88 保護者の言葉
- 89 思いは伝わる
- 90 励まし合って子どもに寄り添う
- 91 保護者からの手紙
- 92 いいところ見つけ

「教師になってよかった」と感じた瞬間エピソード

【子どもとの関わり編（小学校）】

1 教え子との再会

教師になってよかったと思えるとき。それは、教え子の活躍、成長した姿が見えたとき。社会人として活躍する教え子の姿を、何人も見てきました。学校を訪問してくれる業者として、市役所の職員として、立派な職人として、講演会の講師として、そして同業の教師として…。あの頃は子どもだと思っていたけれども、しっかりした大人として訪れ、懐かしがってわざわざ挨拶に来てくれる教え子も多い。

「あの頃はお世話になりました。」

と笑顔で話しかけてくれることが何より嬉しい。もちろん、その人たちを教えた教師は大勢いるわけですが、その人たちの成長に一役かうことができたかと思うと、教師をしていて本当に良かったなと感じます。まして、

「あの頃楽しかったですよ。」

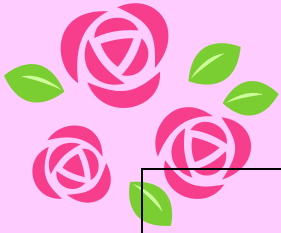
とか、

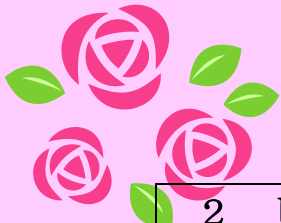
「先生の授業、よく覚えています。」

などと言われたら、そんな思い出の中に自分をおいてくれていることが、この上ない幸せに感じます。また、本人に会えなくても、その保護者の方と会い、

「あの子は今どこどこでこんな仕事（生活）をしています。」

と聞くだけでも、とてもうれしい気持ちになります。人の人生の大切な数年を、共にエネルギーを使いながら共有できる。それこそ、教師という仕事の醍醐味だと思います。





2 じわっと心にあたたかい灯火が残る、私の幸せなエピソード

私が教師になってよかったと思ったことは3つあります。

一つ目は、子どもたちと世界を再発見することです。例えば小学1年生では、「雨の降るときのおい」「生き物の不思議」「木」と「気」は違う意味があること…。大人にとっての「当たり前」が、子どもたちにとっては『世紀の大発見』です。知ることにより、世界の見方が変わります。当たり前になっていたことは、当たり前じゃないんだと、素直に感動する子どもたちに、私が感動します。

また、いろいろなことに挑戦する姿にも感動します。字をうまく書く、計算練習、縄跳び、鉄棒、遊び…。時に泣きます。失敗してくやしくて、友達と言い争って地団駄も踏みます。それでも、自分を鼓舞していくのです。「やればできる。」と言い聞かせて練習する姿。できたときの喜ぶ姿。友の喜びを自分のことのように、手を取り合って喜ぶ仲間の姿…。大人の私はこんなに毎日を一生懸命生きているのかな、と思います。そして、子どもたちに触発されます。1年生の例だけ挙げましたが、そんな姿を毎年、側で見ることができます。

二つ目は、そんな風に関わった子どもたちが、大きくなって連絡をくれたり、会いに来てくれたりしたことです。進学の時、就職の時、何かの節目にふと思い出してくれることは、とても嬉しいことです。保護者の方が、そのときの思い出を語ってくださることもあります。

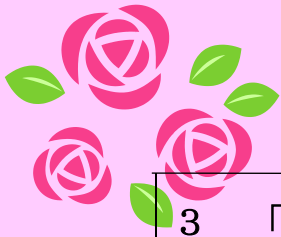
「先生が担任したあの時のクラスの雰囲気、クラスメイトたちがとても楽しくて。だから教師になりました。」

こんな私が誰かの人生において、ささいなことでも役に立つことができた気がしてとても有り難い気がします。同時に、自分をふりかえる機会にもなります。

三つ目は、自分の目標とする生き方をされている人に出会えることです。

「人は幸せになるために生まれてきたのですよ。」

と絵本を基に話してくださった方。人と人との思いや出会いをつなげ、どんどん人の輪を広げ、心を結びつけていく方。地域の魅力を知り、その魅力を発信される方。真摯に人の話を聞き、まっすぐきらきら輝く目で夢を語る方。子どもの可能性を信じ、引き出そうとする方。世の中をよりよくすることを考える方。御自身の追求されていることを、楽しくおもしろく伝えてくださる方。他者に寄り添い続ける方。そして、御自身の信念を持ちつつ、誰もが気持ちよく働くことができることを考えられ示範率先をされる方。苦しいときに話を聞いてくださり、一緒に悩み、励ましてくれた方。先輩、後輩、地域の方々。たくさんの人に出会い、「こんな人になりたい」という思いがたくさん生まれました。そして、温かい心にふれることができました。



3 「子どもの純粋な心が間近で感じられます！」

教師自身の心も癒やされる素敵な仕事です」

休校明けの間もない頃 6年生がプール掃除をしてくれました。近く始まる体育でプールを使った学習ができるように、プール一面にどっさりたまった泥を全部取り出してくれました。その日の給食の放送で、私は6年生の活躍を伝え、全児童の拍手で感謝の気持ちを贈り届けました。

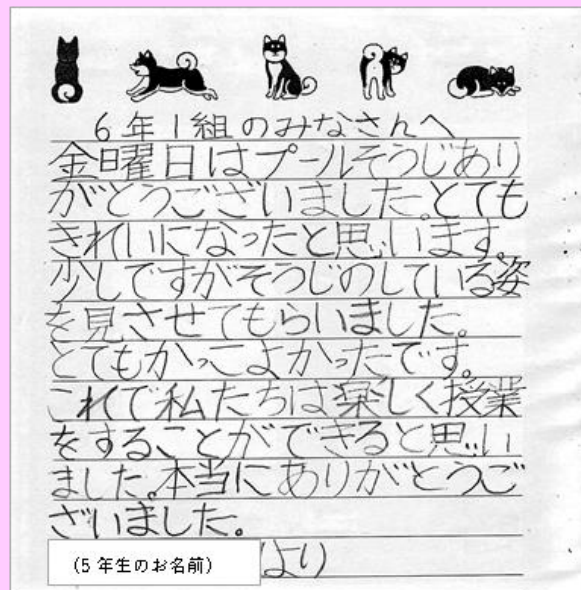
週が明けて月曜日、6学年の職員が次のことを私に教えてくれました。

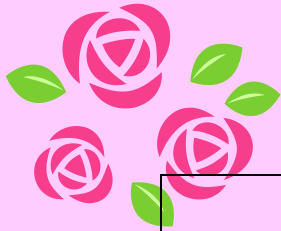
「5年生の子が6年生の4クラスにそれぞれ感謝の手紙を届けてくれました。担任の先生に言われたわけでもなく、進んで手紙を書いてきてくれたそうです。とても素敵な行いで嬉しいです。これがその手紙のコピーです。」

6年1組のみなさんへ

金曜日はプールそうじありがとうございました。とてもきれいになったと思います。少しですがそうじをしている姿を見させてもらいました。とてもかっこよかったです。これで私たちは楽しく授業をすることができると思いました。本当にありがとうございました。 5年〇〇より

小学生の心はとっても純粋で「いいものはいい！」と素直に表現できる子どもたちがいっぱいいます。人間っていいな！子どもって素敵だな！子どもの純粋な心を間近で感じられる瞬間。これは教師の醍醐味のひとつだと思います。





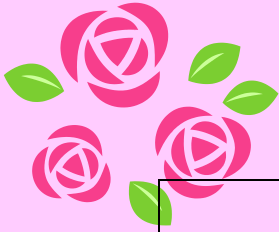
4 1年間の物語

先日久しぶりに、初めて6年生を担当した年の卒業アルバムを開いた。

「4月、クラス目標が決まった。「努力と挑戦」だ。前向きで元気いっぱいなクラスにぴったりな目標だ。5月、遠足。長い道のり、調子の悪い友達の荷物を持ってあげる人を見た。みんなの素晴らしい姿に感動！6月、運動会。応援リーダーを中心に下級生に応援を教えにいった。全校をひっぱる大変さを知ったね。7月、市内陸上大会の練習が始まった。みんなの頑張りが天に届きますように。9月、縦割りでのイベント。計画から運営まで6年生が主体となって進めた。迷いや焦りで不安な時もあったね。いきいきとした顔でそれぞれの持ち場で頑張って大成功！10月、市内陸上大会。みんな緊張した顔でスタートに立つ。みんなこの日のために頑張ってきたんだね。11月、修学旅行。ハプニングもあったけど、それを乗り越える姿から、みんなの素敵などころをいっぱい発見できたよ。12月、卒業式に向けての練習が始まる…（一部抜粋、編集）」

自分が子どもたちにあてたメッセージを読み返し、改めて、教師という仕事はなんてドラマチックなのだろうと思った。24年間続けてきた教師生活には24年間分のドラマがある。自分の無力さにこのまま教師を続けてよいものかと悩んだり、毎日の忙しさに体力の限界を感じたりしたことはあったが、ここまで続けてこられたのは、子どもたちからもらった感動の瞬間が忘れられないからだ。空に出た大きな虹の下で、みんなで「にじ」の歌を合唱したこと。リヤカー屋台に飾りをいっぱいつけ、引き回して秋祭りをしたこと。理科の授業、みんなで考えた実験が大成功し、歓声が上がったこと。その時々の子どもの笑顔が今も自分の原動力となっている。

今では経験を重ねて、担任とは違った場所から子どもたちの1年間を見守る立場になった。私がいつかそうだったように、子どもたちと先生が、苦楽をともにしながら素晴らしい1年間の物語を作り上げることができるように、全力で支えていきたいと思う。



5 寄せ書き

「先生ありがとうございます。この1年楽しかったよ。担任の先生が先生でよかった。」
目を潤ませながら寄せ書きを渡してくる子どもたち。私は何が起きているのか分からなかった。

講師2年目で初めて担任した3年生とは、教員として「初めて」で『特別』な思い出が多い。教科の指導方法で悩んだり、生徒指導や特別な支援を要する児童と保護者の対応で多くの先生方とコミュニケーションを取ったりした。どれも子どもたちのためだった。

上手くいかないことなんてザラ。先輩の先生に厳しく指導されるより、子どもに反応されないことの方が傷つき、涙することも多々あった。

そして2020年2月28日。令和元年度、休校前最後の登校日となった。そんな子どもたちと過ごすことのできる最後の日は特別で教師人生の中でかけがえない1日となった。

教師の仕事は確かに大変。子どもたちのためと考え時間を掛けても思うように行かない授業。保護者からの多くの要望。いつでもやめてやると何度も思った。けれどその度に寄せ書きを見て子どもたちのことを思い出す。

『教師になってよかった』。

6 「教師になってよかった」

2年目の教員生活が始まり、いろいろな壁にぶつかる毎日です。それでも、周りの先生方に支えてもらいながら子どもたちと楽しく生活を送ることができています。本年度はコロナの影響で様々な活動が制限されています。その中でも、

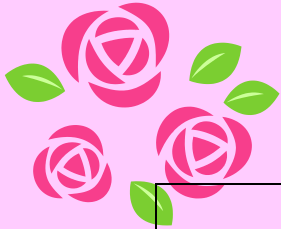
「毎日学校に来るのが楽しみだよ。」

と子どもから言われたり、

「朝、家から出て行くときの顔がとても楽しそう。」

「我が子はずっと学校にいたいそうです。」

と保護者から言ってもらったときは、とても嬉しかったです。子どもにとって、居心地のいい場所になっているのかなと思うと、まだまだ子どもたちのためにできることがあるのではないかと考えてしまいます。そんな子どもたちと「楽しかった！分かるようになった！またこんな授業がしたいね！」と言合えるような授業がしたいです。その瞬間こそ、「教師になってよかった」と感じる瞬間だと思います。まだまだこれからです！その瞬間のために子どもたちと頑張ります！



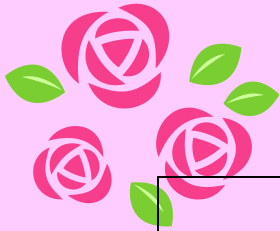
7 小さなエピソード

教師になって2年。この2年間、辛いことや苦しいことの方が多かった私は、まだ、『教師になってよかった』と胸を張って言えるエピソードはない。そう思っていました。

昨年度、大きな希望と不安を胸に私は初任者として初めて教壇に立ちました。初めて受け持った子どもたちは3年生で、とにかく明るく活発な子どもたちでした。しかし、一人ひとりの個性が強い分揉め事も多く、毎日が戦い。子どもたちと過ごす時間はとても楽しかったのですが、それ以上に1日1日学校生活に食らいついていくことに必死でした。

2年目になり、1年生の担任を任せられ、昨年度とはまた違った苦しさが出てきました。それは、入学して間もない子どもたちを1から育てることの大変さでした。右も左もわからない、3年生には通じた言葉や指示が通らない子どもたちを教育する。改めて教師の難しさを、身をもって痛感した年となりました。「自分は教師に向いていないのではないか。」と思うことも増えマイナス思考になっていた頃、先輩教員からある話を聞きました。それは、去年私が担任した子どもたちがよく3年生の頃の楽しかった思い出話をするということでした。その話を聞いたとき私の中で何かが吹っ切れた気がしました。子どもたちと一緒に笑って一緒に悩んだ1年間は決して無駄ではなかったと思えた瞬間でした。

教師という仕事はすぐに結果が出るわけではありません。しかし、子どもたちと共に学校生活を送りながら、ゆっくり、でも確実に信頼関係が築けたときに初めてやりがいや達成感を得ることができると思います。私はまだまだ経験も浅く、大きなエピソードは持っていません。けれども、今日もこうして子どもたちと一緒に成長できていることがとても嬉しく、日々の何気ないエピソードが「教師になって良かった。」と心から感じさせてくれています。これからの教員人生も、こうした何気ないエピソードに幸せを感じながら、子どもたちに負けないよう、1歩ずつ前に進んでいきたいと思っています。



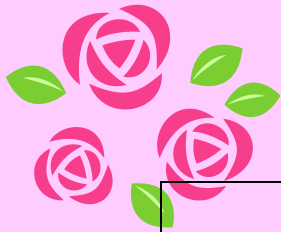
8 何故、まだ続けているのだろう。

この文を書くにあたって、タイトルの内容を改めて自問しました。「自分が、何故まだ教員を続けているのだろう。」と、自分のこれまでを振り返ることで、教員という職業の魅力を改めて感じることができました。

私の教員生活は、学生時代までに想像していたものとは大きく違いました。日々の授業では失敗ばかりですし、分からないことには右往左往し、生徒指導はあと一步響かない…。正直、あまり向いている方ではないでしょう。特に初任～2年目は酷く、「早いうちに辞めよう。」と思っていました。転職サイトもたくさん見ました。そこから気持ちを持ち直して教員を続けていますが、喜びの数と悩み(苦しさ)の数なら、まだ喜びの方が少ないです。

しかし、数年間を、一週間を、一日を振り返るとき、はっきりと思い出せるのは、不思議と、喜びの瞬間ばかりなのです。かけ算九九を一生懸命練習して貰った合格シールに、飛び跳ねて喜ぶ姿。みんなで取り組んだ長縄跳びで自己ベストの壁を破り、抱き合って喜んだときの顔。けんかをして長い話し合いの末の仲直りで出た、泣き笑いの顔。自分を表現するのが苦手だった子が、リーダーとして皆の前に立ったとき、こちらに見せたはにかみ笑顔。一緒に変な踊りをしてお腹を抱えて笑った姿。何でもない日の小さな喜びかもしれませんが、子どもにとっても私にとっても、その瞬間だけの、唯一無二の喜びなのです。

これらの喜びの瞬間は、こちらが心を開いて子どもに向き合い、子どもがそれに応えてくれたことで生まれたものでした。価値でいえば、悩みや苦しさとは同じ天秤に乗せられない程素敵な瞬間です。教員以外の職業のことは詳しく知りませんが、これだけ心を開いて、それに応えてもらえる仕事は他に無いでしょう。ふと振り返ったときに、「教員になってよかった。」と感じられる、そんな、他に代えがたい瞬間に魅せられて、私は毎日、学校に向かっているのです。



9 「心からの笑顔」

私が教師になって良かったと感じる瞬間は、子どもたちの心からの笑顔を見た時です。逆上がりが初めてできた時の「やったあ！」の笑顔や、普段なかなかできない体験をした時の笑顔です。中でも、3年生がレンコンの収穫をした時の笑顔は忘れられません。地域の方に協力していただき、泥の中に入ってレンコンを収穫しました。泥の中に入ることも、泥を手で掘ってレンコンを探し出すことも、初めての子ども達です。

「レンコン見つけた！ああ、引っ張ったら折れちゃった。」

「今度こそ採れたぞ。うわあ、3つ繋がってる！」

「立派なレンコン！料理したらおいしそう。」

と、生き活きとした表情でした。

コロナ渦で活動が制限される中、お日様の下で、子どもたちの久しぶりの笑顔を見ることができました。地域の方の温かさに感謝し、自然と触れ合った子どもたちの心からの笑顔に感動した1日でした。

10 「魔法の言葉」

教師になってよかったと感じるのは、子どもたちの笑顔に会えることです。頑張りや優しさに会えることです。1年生の子どもたちと勉強していたときです。

「先生、いつも勉強教えてくれてありがとう。」

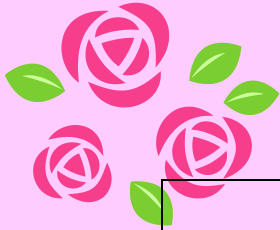
と休み時間に声を掛けられました。わかりやすく楽しい授業を子どもたちとつくっていきたいと思っていますが、なかなかうまくいかず悩むこともあります。しかし、きらきらしたまっすぐな瞳で、

「今日勉強楽しかった。」

「もっとやりたかった。」

と声があがるととても嬉しい気持ちになり元気が出ます。

優しさと元気をいつもありがとう。



11 授業は「L I V E」

「教師になってよかった」ことは授業ができることです。授業をしていると「L I V E」を感じます。子どもたちのつぶやきや、発言や発表がつながって一つの問題を解決したり、また課題に対して考えが広がったりする様子は、まるでさまざまな楽器や音が重なって奏でるオーケストラの演奏「L I V E」のようです。いくつかの学校、さまざまな学年の子どもたちと出会いましたが、同じ授業は一度もありません。その場でしか味わうことのできない躍動感や達成感は、リモートや動画では味わえないものだと思います。

子どもたちができるようになる姿、夢中になって取り組む姿、自ら学んでいく姿に日々感動を覚えています。学んだことが生かされて、そして子どもたちの生きる「L I V E」ための力となる授業をしていることに幸せを感じます。

「この資料を用意すると、あの子がどんな反応をするかな。」

「こう言えば、みんなの気持ちがのってくるだろうな。」

そんなことを考えながら授業の構想を今日も練っています。

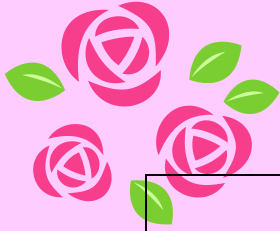
12 私の宝物

「何それ、やってみたい！！」

「～～ができた！！」

授業をしていると子どもたちからこんな言葉が聞こえてきます。嬉しい笑顔、楽しそうな表情、真剣なまなざし、そして険しい顔、授業をしていると子どもたちの色々な姿が目飛び込んできます。

教師になって2年、そんな子どもたちが大好きになりました。子どもたちのために毎日とことん授業を計画します。考えた授業が上手くいくととても嬉しくなります。子どもたちの達成感が、自分自身の達成感につながります。「がんばって考えて良かった。」と強く思います。納得のいく授業ばかりではありませんが、色々な言葉や表情をくれる子どもたちと過ごす時間は、私にとってかけがえのない宝物です。



13 悩み相談

「先生、御指名です。」

ああ、昨年度担任した2年生のHさんか…。本校では生徒指導用のアンケートに、担任には言いにくいこともあろうかと、誰に相談したいか書く欄がある。以前も指名を受け、別の子の悩みを聞いた。泣いて辛さを訴える子のお話を聞くことは、聞いている方も辛くなるものである。私は覚悟を決めて、Hさんを訪ねた。私を見つけると、もじもじし始めた。まだ幼い彼にも悩みはあるのかと複雑な気持ちになった。

「お話があるって聞いたけど、なあに？」

「あのね、あのね…言いにくいなあ。」

「いいよ。落ち着いて言ってみて。」

「うん…先生、毎日お仕事頑張っているでしょう。だから、いつもありがとうって言いたかったの。」

サプライズ！目の前が一気に明るくなった。相談される側が幸せになる悩み相談があるなんて。これだから教師は面白い。

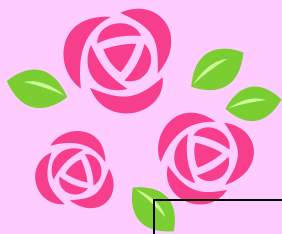
14 子どもの小さな笑顔にほっこりできる日常

私は、給食の時間が好きです。もちろん、美味しいからですが、それだけではありません。配膳の時間になると、当番の子が、

「先生、お茶どうですか？」

と聞いてくれます。重たいやかんを両手で持って、こぼさないように、そうっとコップに注いでくれるのを見ていると、なんだかレストランで接客されているような気持ちになります。きっと、この子は大人になっても『おもてなしの心』で、さりげなく気遣いができそうだなとほっこりします。

小学校は、社会の縮図だと思います。いろいろな個性をもった人と人々が生活する上で、衝突したり、けんかをしたり、仲直りをしたり、村度したり……。大人も同じですよ。小学校は、子どもなりの小さなおもてなしに、「大人の方が教えられているな」と思うような、ほっこりできる日常があります。先生になって、改めて、小学校って素敵な職場だなと思います。



15 ちょっとした一言から

教師になって十数年。今まで様々な子どもたちと出会ってきた。子どもたちの数だけ、語り尽くせぬ思い出がある。特に印象深い学年はと聞かれれば、間違いなく教員になって初めて受け持った子どもたちだと答える。

右も左も分からない新米教師の私。目の前の単学級 40 人の子どもたち。忙しい毎日の中、「環境を考える市民の集い」での学校発表を任せられることになった。30 分の実践発表をどうしたらよいのか。子どもたちの思いを大切にし、共に学び、共に悩み、共に前に進もうと精一杯頑張って取り組んだ。

「協力に勝る力はない。」

「考えれば必ず道は広がっている。」

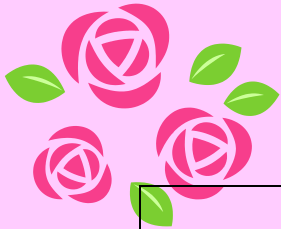
「最後にみんなで笑おう。」

繰り返し鼓舞し続け、見事、当日を大成功で終えることができた。どの子どもたちにも笑顔が溢れていた。

時は経ち、10 年後の成人式の日。立派な「大人」になった「子どもたち」との出逢い。これぞ教師の醍醐味と、余韻を味わっていたときに、1 人の子どもから笑顔でこんな言葉を貰った。

「先生の言葉が励みになって、今でも頑張ってこられました！！ありがとうございます！！」

考えてもいない、思いもよらない言葉だった。あの時の思いや言葉が、10 年間、子どもたちの人生の支えになっていたのだと思うと、胸が熱くなった。教師という仕事の素晴らしさと、やりがいを強く感じ、今まで教師を続けてきてよかったなあと心から思った。



16 小さな紙切れのメッセージ

昨年の4月。大学を卒業して、期待半分、不安半分。私は3年生を担当させてもらうことになりました。自分にとって初めて受け持つ、特別な子どもたち。「最後までしっかり頑張るぞ。」と思ってスタートしたこの子たちとの日々はとても充実しており、あっという間に過ぎていきました。ところが、もうすぐ冬休みだというある日、頭をズンズン突き刺すような、今まで感じたことのない痛みに見舞われました。

「おかしい。」

そう思いつつも、私は子どもたちの前で何とか笑顔で頑張りました。

「先生なんだから、みんなの前ではしっかりしなきゃ。」

しかし、冬休みに入っても、一向に頭痛が治りません。そこで、脳神経外科を受診すると、「脳に異常がある。」

と宣告されたのです。私は涙が止まりませんでした。

「手術が必要なのか？失敗したらどうなるのか？もう教師は続けられないのか？このままあの子たちに会えなくなってしまうのか？」

不安がどんどんどんどん、湧くようになってきました。

その後は再検査、検査入院ととんとん拍子で決まっていき、私は将来のためにも「手術をする。」という決断をしました。

それとちょうど同時期に、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、学校が休校になることが決まりました。突然迎えたみんなと過ごす最後の日。私は手術をすることをみんなに言い、そのままバタバタとお別れの時間になってしまいました。

「ああ、みんなと最後きちんと話せなかったな・・・。」

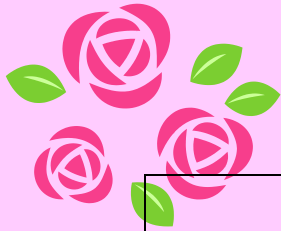
そう思いながら、みんなと最後のさようならを言った後です。1人の女の子が何やら紙切れを渡してきました。

「はい、先生。」

そこには一言、 “○○先生、がんばってきてね。”

私の話の後、帰るまでに時間がない中、何とか書いてくれた手紙なのでしょう。ノートかプリントをちぎったような紙に書かれたたった一言の手紙でしたが、私にとっては、それはそれは嬉しいものでした。子どもたちの成長を支える仕事でありながら、私も子どもたちにたくさん支えてもらっていたんだと感じ、とても素敵な仕事に就けたなと思えた、初任の年、最後の日でした。

あの頭痛から1年。今は朝晩薬を飲み、毎晩自己注射をして必要なホルモンを補っている生活ですが、体はすっかり元気で、かわいい1年生と一緒に毎日走り回っています。



17 再会

私が教員になって3年目、中学校で研修会が行われました。私は中学3年生の社会科の授業を参観しました。授業が終わり休み時間になると、1人の生徒に声を掛けられました。

「先生、私のこと覚えていますか？」

名札を見ると、その生徒は私が教育実習で行った小学校のクラスにいた女子児童だったのです。私はその子のことをよく覚えていました。当時、授業に前向きに取り組み、学級委員を務め、私のために教育実習お別れ会を企画運営してくれた子でした。教育実習は大変さもありましたが、子どもの成長を身近に感じ取ることができる毎日楽しさの連続でした。教育実習を通し、「教員になりたい。」という気持ちがより一層高まりました。

私はお別れ会の時、

「絶対、小学校の先生になってみせるね。」

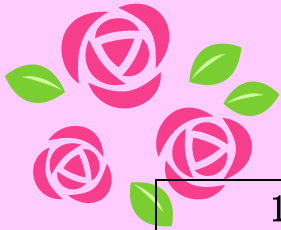
とその子たちと約束しました。私は教員採用試験に2度失敗しました。しかし、その子たちとの約束を胸に、3度目の挑戦。やっと合格できました。まさかその子たちにもう1度出会えるなんて思ってもみませんでした。生徒に、

「先生、夢叶えたんですね。」

と言われ、とても心が温かくなりました。あの時の出会いが私の夢を支えてくれていたことを実感し、本当に嬉しかったです。

7年越しではありましたが、お礼を言うことができました。

「みんなのおかげで先生になれたんだよ。ありがとう。」



18 「1ヶ月前のぼくは5点。でもね、今は95点！」

「1ヶ月前のぼくは5点。でもね、今は95点！」

そう自信満々に話してきたのはAさんでした。1ヶ月前のAさんとはいうと、うまくいかないことがあるとすぐに怒ってしまったり、学習になかなか集中できずにイライラしたりする様子が見られました。時には、私に対しても怒りをぶつけてくることもありました。そして、その後必ず、

「ぼくはだめだ。」

と後ろ向きな言葉を自分に向け、涙を流す様子が見られました。担任として、どのようにAさんと接したらよいのかとても迷いました。

そんな時、必ず同僚の先生方が声をかけてくれました。相談すると、気持ちをわかってくれたり、アドバイスをくれたりしました。自分1人でAさんとの接し方を考えるのではなく、周りの先生も一緒に考えてくれることでとても心が軽くなりました。学校現場で働いていると、自分1人では解決できないことがたくさんあると思います。それでも働き続けられるのは、周りの先生たちに支えられているからだなと思います。

先生方にアドバイスを受けたことを実践したことはもちろんですが、自分でもAさんと関わる時に意識することを決めました。それは、「わかろうとすること」です。私自身、困ったり苦しかったりする時に先生方から気持ちをわかっってもらって心が軽くなったので、Aさんの気持ちもわかろうとすることで気持ちを軽くできたら良いと思ったからです。そうしてAさんと関わるようになると、何がAさんの中で苦しくなってしまう原因なのかがなんとなくわかるようになってきました。それと同時に、Aさんがイライラすることが減っていきました。

そして1ヶ月ほど経ったある日、急にAさんが私に

「1ヶ月前のぼくは5点。でもね、今は95点！」

と話してきたのです。そして続けて、

「先生、ありがとう。」

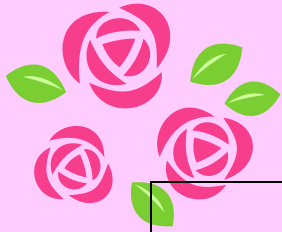
と言ってくれたのです。その瞬間、少しでもAさんの成長の助けになったのではないかと、とても嬉しい気持ちになりました。子どもたち1人1人と関わっていくことはとても難しいことだと思います。それでも、子どもたちの成長の1番近くにおいて、応援できること、とても幸せだなと思います。最後に、

「なぜ100点じゃないの？」

と聞くと、

「だって、95点ならまだ伸びそうでしょ。」

とAさんは答えました。まだまだ伸びたいと前を向くAさんに出会えたことも、とても幸せです。



19 最高な出会い

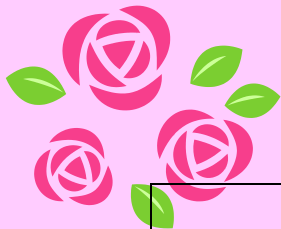
自分の職業を人に言うと、
「教師は大変だね。」

と毎度同じ言葉が返ってくる。大変だけではない。最高であって、そして大変。これからの未来を創っていく子どもたちの人生の一部に関われる唯一無二で面白い職業であると思う。

今年は、コロナウイルスの影響もあって先行きが全く見えない4月だった。私は今年度異動し、新しい学校からのスタートだった。前に勤めていた学校の子どもたちにもしっかりと「さよなら。」が言えず、そして新しい学校では初めての6年生を受け持つことになった。4月は4日間のみ登校。そして5月末までの休校。コロナウイルスの状況は今も落ち着く気配はない。

5月末から再始動したクラス。大きさは様々だが、問題がない日は無い。いつもより増えた授業数。いつもと違った運動会。県内に1泊2日になった修学旅行。でも毎日が最高に面白い。子どもたちとのやりとり、授業。どの瞬間でも教師っていいなとつくづく思う。こんなイレギュラーな年を乗り越えた子どもたちの未来はどうなっているのだろうか。考えるとわくわくが止まらない。いつか、「あの時は・・・。」

と言って笑える日がきっと来ると思わせてくれる子どもたちに出会えたことが本当に幸せなことである。



20 何気ない一言

教師になって10年がたった年、教え子から手紙が届いた。差出人は、初任者の時の教え子。突然の手紙で驚いたが、それ以上に嬉しかった。当時5年生だった子たちが20歳になり、立派に成長したことが伝わってきた。

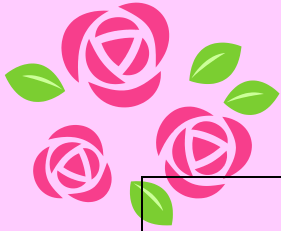
自分にとって初めての教え子だったこともあり、その年のことはよく覚えている。とても優しく、おもしろい子たちだった。自分も教師になりたてで、知識も経験もなく若さと勢いだけでやっていた。手紙をきっかけに、その当時のことをいろいろと思い出した。その手紙から、その時の教え子たちと会う機会ができた。その時に、当時学級委員だった子が、

「僕は自分で言うのもなんですが、それまでは先生には怒られずにやっていたんです。でも、先生はごまかそうとした僕に言いましたよね。『信頼は壊れるのは一瞬だから』と。今でも覚えているし、ずっと自分の心にある言葉です。」と話してくれた。その言葉を聞いてなんとなく思い出した。が、本人にとって、そこまでの言葉になっているとは思わなかった。他の教え子たちも、

「そういえば、先生こんなこともあったよね。」

といろいろな思い出話を聞かせてくれた。授業については、一切覚えてない、と言っていたが、他の小さな出来事は結構鮮明に覚えていて、よい思い出になっているようだ。

自分の何気ない一言が、子どもの心に響き、それがずっと残っていることもあると知った。ほんの少しかもしれないが、その子の人生をよりよいものにできていると知って嬉しかった。教師をやっていてよかったと思った瞬間だった。



21 ちょっとした一言から

「苦しいなあ。もう帰りたいなあ。」

夏休みから始まった陸上練習。最初はすごくつらかったです。とても暑く、汗が何度もほほを流れました。ももが筋肉痛になり、歩くのもやっとでした。でも、途中でやめませんでした。毎日練習に来ました。・・・〈中略〉・・・しかし思うように記録が伸びず、陸上大会直前になっても自分の記録に納得ができませんでした。もっと速く走りたいのに走れなくて悔しかったです。「だめだ、がんばっても記録が伸びない。」とあきらめかけ、やる気もでませんでした。そんな時、

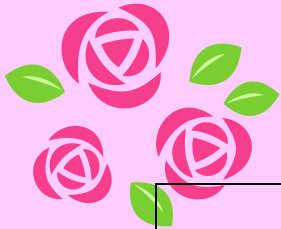
「頑張ったじゃん。」

と、〇〇先生が声をかけてくれました。やる気が出て、またがんばることができました。

陸上大会では、〇〇先生の言葉や練習してきたことを思い出して走りました。ゴールした後、「やったあ。最後まで走ったぞ。」と思いました。すっきりして嬉しい気持ちになりました。練習をがんばってよかったと思いました。最後までやり抜く力がついたなと思いました。

ある6年生が卒業文集に書いてくれた1節です。6年生担任ではなかったけれど、一緒に陸上練習を積み重ねてきた6年生の子どもたちでした。そんな6年生の1人である彼女に何気なくかけた一言が、こんなに彼女の気持ちを支えたことになっていたことを、卒業文集を読んで初めて知りました。

子どもたちの成長に寄り添えたのだと思うと、嬉しさもひとしおでした。



22 小さな小さな「わかった！」と出会えた時

1年生のAさんが3行の文章問題を読み終わった。

「わかんないよー。」

とつぶやく。声をかけようかと思った時、Aさんが言った。

「先生、絵を描いていい？」

心の中で私は、「やった！」と小躍りしたい気分だったが、平静を装って、

「いいよ。やってみて。」

と声をかけた。突然、Aさんが叫んだ。

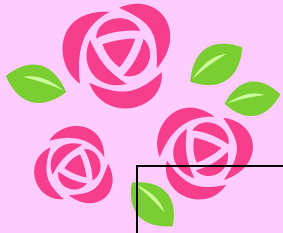
「わかった！これって足し算じゃん。」

Aさんは、文を読むことが苦手。でも、得意な絵を描いたらヒントが出てくることを伝えてきた。満面の笑みと自信にあふれた顔が忘れられない。

Bさんの文字は、マスからはみ出てしまう。書きたいことはたくさんあるBさん。あるテストの時、回答欄に直線を引いてマスを作り、そのマスに1字1字を納めてあった。内容より何より、自分でマスを作って書いたBさんに、大きな花丸をあげた。マスがあればきれいに書くことができるBさん。自分の苦手なところがわかり、なんとかしようとした姿が素晴らしい。保護者にそのすごさをすぐに伝えた。

吃音の子どもたちは、私が知らない世界をたくさん教えてくれる。Cさんはその中の1人。「ギャグにしちゃえばいいよ。」と周囲の子を笑いの渦に巻き込みながら、吃音のある自分を受け入れていた。そんなCさんが、離任式のお別れの言葉に立候補し、離任する担任に向けて全校の前で話したというのだ。「吃音があつてうまく言えない僕を励ましてくれてありがとう」と。吃音があることを隠そうとせず、それよりも担任に伝えたいことを伝えたCさんはすごいと思う。Cさんから学んだことはとても大きい。そして子どもを支える保護者の存在の大切さを痛感した。我が子と向き合い、我が子を温かく見守る保護者から、「吃音の話ができてよかった。聞いてもらえてよかった。先生が学級担任になってくれればいいのに。理解してくれる先生が1人でも増えればいいのに。」そんな言葉が私の日々の指導の原動力となっている。

通級教室では、学級担任とは違った出会いが毎年ある。「通級指導教室で私ができることは何だろう。週1時間の指導の中で伝えられることは何だろう。」それは常に課題だ。課題だらけの自分が子どもたちのちょっとした力になっているかと感じられた瞬間。子どもの意欲の持続の基になっているかなと感じた瞬間。保護者とともに子どもを支える1人となれたかもしれないと思えたその瞬間がたまらない。



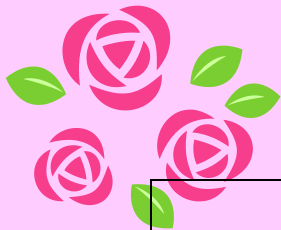
23 良さを見つける

Aさんは元気いっぱい、思ったことが全部言葉で出てきます。動きも激しく、自分の思いが通じないと、椅子をがたがたと揺らしたり大声で怒鳴ったりします。信用していない人に声を掛けられることが大嫌いで、素直に返事ができません。そんなAさんの良さはなんだろうか。よくよく見ていると、「怒鳴っているけど、言っていることは正論だ。理解力が高いから周りよりも早く気づき、言葉に出てしまうんだな。」と気づきました。そこで、Aさんの良いところをたくさん認めて、直すべきことは明確に、でも穏やかに伝えるようにしようと決めました。

ある日職員に、

「Aさん、最近表情がかわいくなったね。あいさつも返ってくるようになったよ。」

と言ってもらいました。Aさんが少しずつ少しずつ変化し、人との上手な関わり方を身につけてきたことに、「教師になってよかった」と感じました。日々一緒にいると、見過ごしてしまいがちな変化を認めて、その子の良さを見取ることができる教師を目指していきたいと思いました。



24 大きくなったね

「あら、先生。ご無沙汰しています。お元気そうで。今日は、高等部の説明会だったんですよ。その節は、本当にお世話になりました。」

インフルエンザの予防接種に病院へ行った時のこと。

「〇〇さん？大きくなったねえ。」

一緒にいたお子さんは、初めて校長として赴任した小学校でのお母さん。そして1年生だった〇〇さんは、ブレザー姿のりりしい少年に成長していた。〇〇さんは、3年生から特別支援学校へ転校した。小学校入学という貴重な2年間に春の桜の中、そして暑い日も、寒い日も一緒に通学路を歩き、一緒に過ごした。支援学校に転校した後も、毎年年賀状をくださる。地元の高校へ通わせたいけど、支援学校が本人にとって1番ふさわしいだろう。支援学校へ転校を決めたときの複雑な思いを忘れたことはない。

「先生？」

「うん。わかる？」

元気そうだ。立派に大きくなったね。選んだ道を力強く歩んでいる。本当に会えて嬉しかった。もうすぐ、定年を迎える自分にとって、最高のご褒美をいただいた気がした。ありがとう。元気で頑張ってほしいな。

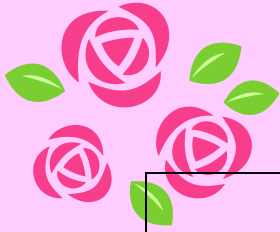
25 「もう1回見せて！」道徳の授業で

「(ビデオレターを) もう1回見せて！」

授業の後段、スクリーンに映したビデオレターで、交流学級の担任が、「Aさんのよいところは、配膳台をすぐ拭くことができるように、台拭きを持って配膳台の横で待っているところです。」

とよいところをAさんに向けて語りかけた後の発言。

「かっくん」の絵本を教材にして、個性の伸長の内容、自分のよさに気付くことを考えた授業での発言です。なかなか自分に自信がもてず、自己肯定感がもちにくいAさん。自分のよいところを価値付けられ、照れくさいのですが、喜びいっぱいの表情。授業で、子どもたちの成長に関われることは、私の幸せです。



26 教師としての喜び

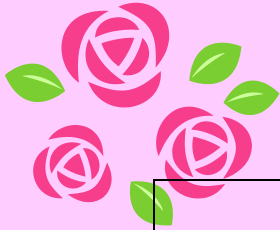
教師になってよかったと感じるのは、「人の役に立てた」と実感できたときである。特に、困難の中で試行錯誤しながら頑張ろうとしている子どもの成長の支えになれたときには、充実感や幸福感で満たされる思いがする。

しかし、実際のところ日々の学校生活でそのような思いを抱くことは多くはないと言ってよい。発達的な偏りで対人関係がうまくとれず、自分の気持ちとは裏腹な言動をしてしまう子ども。家庭での出来事を引きずって友達に嫌な思いをさせてしまう子ども。子どもたちは、様々な背景をもって学校生活を送っている。

自分の学級に学年途中から突如不登校になった児童がいた。話を聞くと、学習の遅れ、親子関係、学校での対人関係に悩んでいることが分かった。課題解決に向けて、子どもの思いを聞き、保護者と話を重ね、そして職員間でも検討を繰り返す日々が続いた。友達と一緒に授業を受けたいと願っていても、心と体が思うようにならない現実と向き合いながら、保護者と試行錯誤する日々が続いた。しかし、運動会や社会科見学、学習発表会等の行事への参加を通して、少しずつ仲間と過ごせるようになっていった。それは、試行錯誤の中で、ありのままの本人の姿を認め、親子関係の歪みを見直すことができるようになってきたからであると思う。

その児童は6年生になって、毎日学校に登校できるようになり、ほとんどの時間を教室で過ごせるようになっていった。表情が明るくなり、中学校での目標を楽しく話す姿も見られるようになった。本当にうれしかった。

教師の仕事は課題解決の連続であり、決して楽しいことばかりではない。しかし、小さなことでも確かに人の成長に役に立てたと感じるとき、そこには間違いなく教師ならではの感動がある。教師は人の役に立つ喜びがたくさん詰まったやりがいのある仕事である。



27 「ありがとうございました。」

新採2年目の夏。6年生担任。当時は夏のプールは競技大会があり、高学年は特に熱が入っていた。しかし中には苦手な子がいる。その子は水に体を預けることができず、すぐに立ってしまう。なんとか浮く体験をさせたいと思っていた。そんなときヨーロッパの死海でプカプカ浮いている人の映像を見た。塩分が濃く、浮力が増しているというのだ。「これだ」と思い、腰洗いそうに水をため、食塩を20kg入れた。これならいやでも浮くから、問題解決…にはならなかった。食塩の飽和水溶液は水100gに対して約36g、腰洗いそうには水約1000kg、飽和溶液を作るには塩360kg必要であることは、いまなら容易にわかる。ただ一心に「なんとかしたい」と言う思いだけで突き進んだ実践であったが、失敗に終わった。しかし、その子が最後に、

「ありがとうございました。」

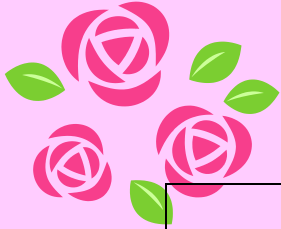
と言ってくれたことで助けられた。

28 最高の瞬間

平成14年、6年担任をした。その子たちが4年生の時、廊下の歩き方で自分のクラスの子でないにもかかわらず教室に入り、大声で指導したことがあった。

2年後にその子たちの担任となり、子どもたちは戦々恐々としていた。(と後で聞いた。) 出会いは最悪であったが、彼らの発想や実行力は認めていた。運動会のネーミングを「燃えろクワッ、クワッ大運動会」としゃれたものにしたり、全校代表委員会を企画し、体育館に全校児童を集め、「1年生がまだ仲間になっていない。どうしたら仲間になれるか」と問うたりする企画を次々に実践した。6年生として、何ができるか、何を残すか等日々討論することがとても楽しかった。

1年はあっという間に過ぎるもので、卒業式を迎えた。当時卒業の言葉はグループごと練習はするが、全体で通しての練習はせず、他のグループの言葉は当日初めて聞く。そして言葉も終わり最後の曲。1番と2番の間奏中、クラス1のいたずら坊主が1人で感謝の言葉を発した。これは誰も知らなかったこと。私は担任席を離れ、卒業生の中に入り、ボロボロになって歌を歌った。高き志を求め、最高の自分を表現した姿を最後に見られ、最高の瞬間をともにできたことを今でも誇りに思う。



29 やっぱり教師はいいな

私の小さな頃からの夢は、小学校の教師になることでした。楽しい時もつらい時も私たちのそばに寄り添ってくれた小学校当時の担任の先生に憧れ、先生になりたいと思うようになりました。昨年1年講師を経験させていただき、晴れて今年度から「教諭」として子どもたちの前に立っています。

しかし、教師の仕事は私が夢見ていたようなキラキラした仕事、というだけではありませんでした。これまでの経験がない中何とか子どもたちと接する日々。悩むこともたくさんあります。

それでも、私は、やはり教師になってよかったと感じています。子どもたちの成長する瞬間をたくさん見ることができたからです。

漢字を書くことが苦手なAさん。宿題の漢字ノートもぐちゃぐちゃでした。何とか意欲を引き出したいと思い、ぐちゃぐちゃなノートの中から1つでもいいところを探そうと、上手く書けたところに花丸をつけました。すると、徐々に丁寧な字に変わっていきました。決して、上手とは言えない字ではありますが、その子が家でじっくり心を込めて書いた字なのだと、伝わってきました。

筆算が苦手なBさん。困って歪んだ表情でした。まずは、どこを理解していないのか、分析するところから始めました。くり下がりの仕方がわかっていないと気づき、絵を描きながら何度も説明しました。どうしたらわかってくれるんだろうと悩んでいた時、

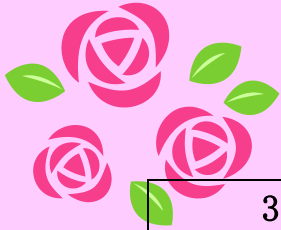
「あ！」

と先ほどまでとは打って変わって明るい表情に変わったBさんがいました。

「何回もやってたらわかった。先生ありがとう。」

と笑顔でした。

他にも、小さな成長の一つ一つが私を笑顔にさせてくれます。そして、こんな風に子どもたちの成長の手助けをできたとき、教師をやっていてよかったな、と嬉しく思うのです。



30 教師になってよかった ～子どもからのあの一言～

私の出身大学では、専門教科というものが存在しない。従って、小学校全科という肩書きとなる。そんな私が、率先して勉強していたのは国語。毎日、授業があるからである。また、新採初年度は、理科を自分で行っていたが、それ以後10数年、自分の学級ですら理科を教えることはなかった。

そんなある年のこと、希望が叶って自分の学級の6年理科を教えることができる年が来た。とは言え、理科をどのようにして教えてよいのか全く無知でいた私は、教科書と指導書を繰り返し読んだ。しかし、読んだからと言って頭に全てが叩き込まれるわけではないし、児童の実態、前時からの流れなど、様々な角度から授業を構想するため、混乱を極め、子どもたちにも大きな迷惑をかけたものと思われる。

ところが、この理科の授業をしているときの子どもたちの驚きの顔やつぶやきに触れていくうちに、「もっと面白く、楽しくやる方法はないだろうか？」と理科の魅力にとりつかれていった。

そこから5年後、学校が2校変わり、思いがけない一言が私をさらに奮い立たせた。この子たちは、私が最後に担任した児童。前年、教務主任として赴任したこの学校で、年度途中で教務主任兼学級担任を行うことになった。それはそれは、精神的にも肉体的にも疲れ切っていたが、教室で一緒にいる時間に癒やされっぱなしで、つつい職員室に戻らずにいて、教務主任の仕事を置き去りにしていたように思われる。

そんな彼らが、二学年進級し6年生となった。勿論、その学級との関係を維持しようと計3年間、理科を受け持つことになった。自分自身、一人一人の個性が手に取るようにわかり、授業も毎時間楽しんでいた。

ある日のこと、6年理科「からだのしくみ」を学習中、

先生 「今日は、お客さんをお呼びしています。」

児童A 「ええっ？ 誰？」

先生 「今、準備室にいるんだけどね。」

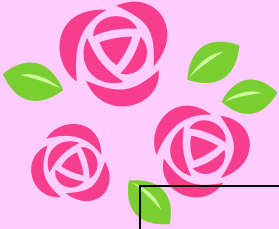
児童B 「ああっ、わかった。でんじろう先生だ。」

児童C 「そんなわけないじゃん。」

児童D 「〇〇のでんじろう先生だら。」

児童E 「そりゃ、△△先生じゃん。」（*△△先生は筆者）

私は、ひっくり返りそうになった。当時も今も、「でんじろう先生」は、あこがれ。まさか、そんな憧れの先生とかぶせてくれているなんて、お世辞でも言い過ぎだけれど、うれしい以外の何物でもなかった。お調子者の私は、こんな一言に踊らせて、以後も理科教育に邁進するのだった。



31 子どもたちと会えること

令和元年度、新型コロナウイルス感染症感染防止のために、最後の1か月は、卒業式を除き、休業日となった。

令和2年度になったものの、学校がスタートしてから4日間しか登校できなかった。そして、そのまま、約1か月半の休業日が続いた。これまでの30年以上の教員生活で経験のない出来事だった。休業日が続き、子どもたちの様子が案じられるものの、何も出来ないもどかしさを募らせていた。5月下旬、やっと登校を再開することが出来るようになった子どもたちが、元気に集団登校する姿が見えたときには、うれしさがこみ上げてきた。改めて、子どもたちが登校するというあたりまえのことが、とてもありがたいことだと気づかされた。また、そんな子どもたちを預かり、成長を見守ることができる教師という職業に就くことのできたありがたさを強く感じた。

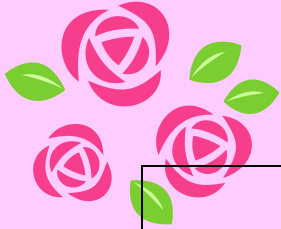
32 ずっとつながっている

掛川駅から市外に出掛けようと歩いていたが、赤信号で止められた。すると、後ろから来た若者に声を掛けられた。

「先生、ぼくわかりますか。」

小学校4年生で担任したA男君だとすぐにわかった。今でこそ立派な青年になったが、4年生当時のA男くんは、精神的に不安定なことが多かった。授業中ちょっとしたことで感情的になり、友達の筆入れを投げたり、テストの点数が悪いと、くしゃくしゃにして破いたりしてしまったりした。現在は、金融関係の仕事をしているというA男くん、落ち着いた話しぶりに、当時を思い出させるような雰囲気は全く感じられなかった。

教師と生徒の関係は、一生のほんの一時期だが、こうしていつまでも覚えてくれていて、声を掛けられ、その成長した姿を見せてもらえるのは、教師ならではの喜びである。



33 惚れ込んだ実践

平成10年、まだ総合的な学習が始まる遙か前の話。持ち上がりの6年担任になった。5年の社会科で稲作を学習し、その実践として稲を育てる活動を計画した。

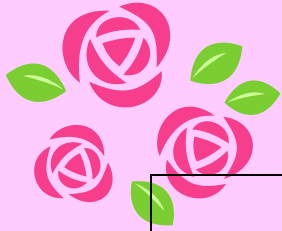
順調に稲も生長し、秋収穫。とれた米をどうするか？ここが子どもたちに考えさせたいところ。とともに担任として是非やってみたい実践があり、子どもたちに伝えた。それは「この米を売りに行く。」しかも場所は掛川駅前。米を売るためには様々な過程があり、学びも多いと考えていた。また、お金を稼ぐことはそんなに簡単なことではないことも学んでほしかった。校長室にこの案を持って説明に行った。校長曰く「学校でお金を扱うことはできない…」保護者にこの実践の是非についてアンケートを採ったり、駅前商店街の人たちに「もし、子どもたちが売りに来たら買ってくれるか」何十件もアンケートを採ったりしたデータを元に再度許可を求めたが…否。結局この実践はお蔵入りとなった。このことを教室で待つ子どもたちに伝えた。「残念ながらできない。」このとき子どもたちからは「でも、なんかおもしろそうなことを考えることって楽しかったよ」の言葉。教師が本気で惚れ込んだ実践は、その思いだけだとしても子どもたちに伝わることを実感した瞬間であった。

34 買い物をしながら

新採3年目。5年生を担当したときのエピソード。算数で、「小数のかけ算」の単元。とにかく算数が苦手なA子とB男。机上の学習では目がうつろ、心ここにあらず状態が続く。これも「なんとかしなくては」と思い、当時消費税3%が導入されたことと絡め、スーパーで買い物をしながら計算力をつけられないだろうか考えた。土曜日の放課後2人をつれ、近所のスーパーへ出かける。

「500円以内で好きなもの買っていいよ。ただしおつりがいくらになるか、消費税(3%、0.03)も入れて計算してね」

と言って買い物をさせた。メモ帳を地面に置き、私もしゃがんで、一緒に計算すること1時間。ようやく買い物終了。半分教えながらではあったが、レジのお姉さんの計算と自分の計算が合い、見事お菓子ゲット。おいしく3人で食べた。これで計算力がアップするとは思えないが、もし、買い物したときに思い出してくれたら、教師冥利に尽きる実践であった。



35 教師の楽しさ

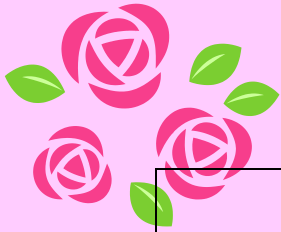
教師の楽しさは、毎日のように子どもたちの笑顔を見られることだと思っています。

子どもたちは、学校生活の中で本当によく笑います。授業や休み時間はもちろん、給食や読書の時間によく笑う子どももいます。そんな笑顔を見ると、こちらにも元気をもらえて、「がんばろう！」という気持ちになります。

ただ、子どもたちは、笑顔の時ばかりではありません。朝から暗い顔をしていたり、難しい問題に顔をしかめていたり、けんかをして泣き出したりもします。そんな子どもたちを、再び笑顔にすることも教師の仕事だと思っています。話を聞いて不安を取り除いたり、「わかった！」という瞬間を作れるように声を掛けたり、事実を確かめながら、同じつらさを味わうことがないように指導したりもします。

教師は子どもたちの笑顔を見ながら、仕事ができます。また、自分の関わり方や準備により笑顔を生み出すこともできます。

子どもたちの最高の笑顔を見るためには、仲間である教師同士の関係も大切です。子どもたちの笑顔を見るために、一緒に努力してもらえる仲間を掛川市で待っています。



36 折りたたまれた1枚の紙

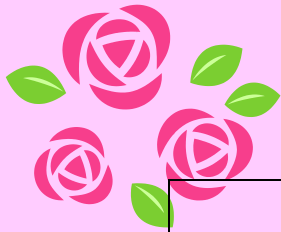
昼休み、普段通りクラスの子どもたちと会話をしていると、一人の女の子が折りたたまれた紙を私に渡してきました。その紙には、「先生へ」とだけ書かれていました。

本年度から、新規で採用され、右も左もわからず、毎日が失敗と反省の繰り返しでした。大学時代に想像していた以上に、現場ではいろいろなことが起こります。日々の業務に追われる私を支えてくれたのは、何よりも子どもたちの笑顔でした。大学時代に趣味で始めたギターで、昼休みに子どもたちの知っている歌を弾き語りしたり、特技の打楽器を帰りの会で披露したりするなど、私が好きな音楽を通して、子どもたちとコミュニケーションを図ってきました。

そんなある日、私に女の子がくれた紙は、初めて子どもからもらったプレゼントでした。驚いて中を開くと、一生懸命丁寧に書こうとした字で、「先生へ、いつもべんきょうを教えてくれてありがとう。先生のひいているギターを聞くとうれしくなります。また3がっきもいっぱいべんきょうを教えてください。」

と書かれていました。これを読んだとき、こんなにも優しい子どもたちの担任だという責任を感じるとともに、教師になってよかったと、とても幸せな気持ちになりました。

まだ教師になって1年経ってもいませんが、この短い期間にかけがえのない体験ができ、この先続く教師人生が楽しみです。



37 負けたけど楽しかった

20年ほど前のことになります。当時6年生の子どもたちと体育の授業でサッカーをしていました。サッカーのゲームの後、負けたチームの子どもたちは、「ああ、つまらないな。」

と不満の声をもらしていました。勝てば楽しく、負ければつまらない。気持ちはわかります。しかし、私は、勝ち負けの結果のみにこだわる姿が残念でしかたがありません。一生懸命頑張れば、勝っても負けても楽しいと思ってもらいたい。

「今日は、負けちゃったけど楽しかった。みんながんばったね。」

そんな感想が聞きたい。一生懸命頑張るその過程に満足してほしい。私の思いを授業の振り返りで子どもたちに伝えました。

「本気で力を出し合った人は、きっとこう思えるはずだ。」

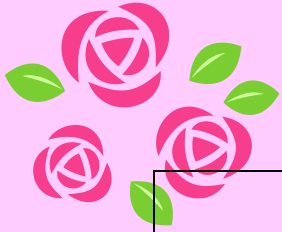
と伝えました。

次の体育の時間、子どもたちの姿は、前回と明らかに変わっていました。全力でボールを追いかける姿、味方にパスをする姿、みんな必死です。残念ながら前回負けてしまったチームは、今回も負けてしまいました。しかし、前回不満を言っていた子が、体育の振り返りで、

「今日は負けてしまったけど楽しかった。」

短い言葉でしたが、目を輝かせて言いました。

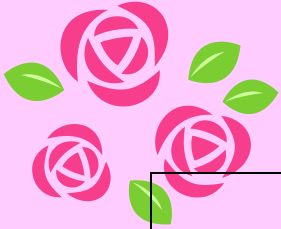
私の言葉を感じ取って、それを体で表現し、理解してくれた子どもたち。うれしかった。短い感想だったけど、私にとって、かけがえのない感想でした。教師になってよかった。今も思い出すエピソードです。



38 「キラリ！ふれあいコンサート」

掛川市には「キラリ！ふれあいコンサート」という市の小中学校が集まって行う合唱の行事があります。4年生担任だった私は、その「キラリ！ふれあいコンサート」に参加しました。子どもたちは、話し合いで決めた「聞いている人が涙を流すような全力の合唱」を作るために、毎日の練習に励みました。朝、音楽の授業、昼休み、帰りの会、家に帰ってからも。ただ歌うだけではだめだと、いろいろな先生に自分たちの合唱を聞いてもらい、アドバイスをもらったり、歌う時のポイントをみんなが意識できるように模造紙に歌詞と意識するポイントを書きこんだりと、まさに全力の練習をしていました。本番は緊張よりも自信に満ちた表情で歌っていました。

後日キラリ！のDVDが届きました。自分たちの成長を感じてもらおうと、練習初日の歌声を聞いてからDVDを見ることにしました。練習初日の歌声はばらばらで、笑い声がちらほらと聞こえるほどでした。そして、本番のDVDが流れると子どもたちは、耳を澄ませて、本番の時のような目をして自分たちの歌声を聞いていました。練習初日の歌声とは同じ人が歌っているとは思えないほどの歌声でした。合唱を聞き終えるころ、子どもたちの目からは涙があふれていました。自分たちの成長を実感し、全力で頑張り続けた練習の価値を知った瞬間だったと思います。その時、子どもたちの成長をこんな近くで見られる教師の仕事は、すごく魅力的な仕事だと思いました。



39 自分の願う姿をも超えた表れを見せる瞬間

国語の授業中

「先生、これって昼なの？夜なの？」

と、ある男の子が発表しました。松尾芭蕉の俳句「古池や蛙飛び込む水の音」について、どんな情景が思い浮かぶのか、絵を描きながら想像を広げる活動をしていた時の出来事です。この授業で、子どもたちは、

「古池だから寂しそう。」

「水の音になるってことは静かだったんだよ。」

「きっとポチャンという音がしたから蛙は小さい。」

などなどたくさん想像を広げて読んでいました。私自身、教材研究を通して、これらの子どもの反応は十分に予想していました。また、このような考え方が出るように、こちらも準備したので、まさに自分の計画通りに授業が進み、手応えを感じていました。しかし、そんな中である男の子が冒頭の発言をしました。私の予想外の考えを子どもがしたのです。

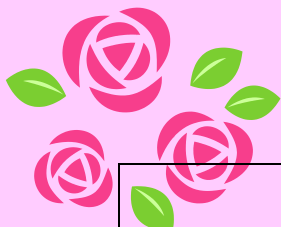
「みんなはどっちだと思う？」

と返すと、

「静かだから夜のイメージにぴったりだね。」

ということで、子どもたちの考えはまとまっていきました。教材の世界に入り込む中で、教師の予想を超えて、新しい考えを生み出し、理由付けできた瞬間でした。

このように、教師が子どものよい表れを願って、日々指導を積み重ね続けたとき、自分の願う姿をも超えた表れを見せる瞬間に巡り会うことがあります。そんな時、本当に教師をしていてよかったと実感できました。他にも、教室になかなか入れなかった子が、ふと教室に入れるようになったこと、みんなで力を合わせて本番に最高の姿を見せてくれたことなど、まだ教師になって数年ですが、教師になってよかったと感じる瞬間にたくさん巡り会えています。これからも子どもと一緒に歩み、そんな瞬間にたくさん巡り会えたらいいなと思います。



40 力強い返事から感じた大きな成長

「できた～！」

「分かった～！」

「先生大好き～！」

小学校での日々は、子どもたちの喜びに満ちた声や、たくさんの笑顔であふれている。それと共に成長していく姿を、間近で見たり感じたりできることが、教師としての楽しみの一つであると思う。

数年前に受け持った A 君。毎日のように友達とのトラブルが続き、ほぼ毎日指導していた。しかし A 君が良い行いをした時には、たくさん褒めるようにすると、トラブルは少しずつ減っていった。周りを元気にする挨拶、泣いている友達への声掛け等、それまで見られなかった良い表れが増えた。

1 年も終わりが近付き、A 君と 2 人で話をしていて時だった。

「今まで誰にも話せなかったんだけど・・・話してもいい？」

と本音で話をしてくれた。A 君の心の中が初めて分かった気がした。心の距離が近付いた気がした。彼に言われた言葉が今でも私の心の中に残っている。

「先生あの時僕に、『〇〇〇〇。』って言ってくれたでしょ。あの言葉があったから、いつも頑張ってこられたんだよ。ありがとう。」

私はその年異動をした。離任式の日、A 君は机に顔を伏せて泣いていた。

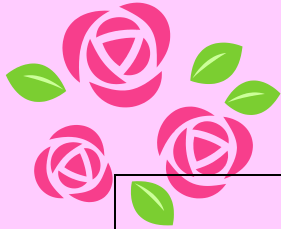
「遠くの小学校から応援しているからね。」

と伝えると、

「きらきらな 3 年生になるよ。心配しないでね。」

と、A 君と私の中での合言葉が返ってきた。真っ赤な目だったが、とても力強かった。出会ったときとは全く違う、眼差し・言葉・態度だった。

たった 1 年間でも、子どもたちは大きく、たくましく成長する。その成長が非常に嬉しく、感動する。自分が伝えた言葉が、関わってきた時間が、その成長につながる。そこに携わることができる教師という仕事に私はやりがいを感じる。



41 音読を通じて生まれる感動

私は、教師になって30年もたちます。ベテランの先生は、若手にとってきつと自信があるように見えると思うのですが、自分は若いときからあまり変わっていないように思えて、自信がありません。授業も、とても満足がいく授業は年に数回しかありません。子どもたちは、今日の内容が理解できたかな、楽しかったかなといつも反省する毎日です。でも、毎年何人かの子どもたちが、

「先生に教わって、授業がよく分かるようになりました。」

とか、

「授業が楽しい。」

と、手紙に書いてくれます。それを読むと、毎年こんな嬉しい気持ちにさせてもらえる仕事なんてなかなかないのではないかと思います。また、1年でどの子どもも大変成長します。その成長を毎日感じられて、一緒に喜ぶことができることで、今までの苦労も吹き飛び、本当に幸せな気持ちになります。

新規採用の学校では、朝の会に詩を暗唱していました。みんなで同じ詩を大きな声で読むことが発声練習になり、暗記力も育つからです。その後、別の学校へ異動してもずっと続けていました。中でも北原白秋の「おまつり」は、子どもたちが生き活きと暗唱でき、振り付けを付けたりリズムをとったり工夫ができるので、毎年、発表会や参観会で発表してきました。最初は

「長いから覚えられない。」

とか、

「うまくつながらない。」

と言っていた子どもたちが、練習を重ねるうちに楽しそうにテンポよく言えるようになってきます。すると、

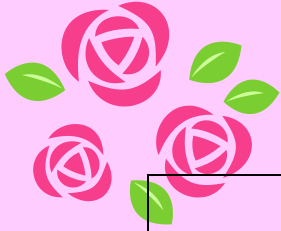
「先生、もう1回やるか。」

とか、

「今日もやろう。」

と自然に声があがり、集団読みの楽しさ、一体感、余韻や感動を共有できるようになります。この感動が、毎年、詩の暗唱や「おまつり」の詩の発表を子どもたちとやろうという原動力となっています。

ほんの少しの工夫で、子どもたちの前向きな気持ちが育ちます。こんな素敵な職業を長く続けてこられたことに感謝し、元気なおばあちゃん先生を目指して、日々精進していきたいと思っています。



42 教師の魅力を感じる瞬間

私は、教師8年目です。私がこの職の魅力を感じる瞬間の一つに、「出会い」があります。これまで、約1500人の子どもたち、そして、その保護者の方、地域の方との出会いがありました。こんなにもたくさんの人と出会うことができる職業は、あまりないと思います。また、出会いの数だけ、学びがあります。

1年目に出会ったAさんは、毎日、授業中外で遊んでいました。Aさんとどう向き合ったら良いか、どう声をかけたらいいか、考え続けました。自分を責めることもありましたが、Aさんとの出会いが、私自身を成長させてくれました。Aさんが卒業する日、

「先生、あの時はごめんなさい。」

と言われた時は、諦めず向き合ってた良かったなと思いました。教師という職業は、子どもの成長を見守ると共に、自分自身も人として成長し続ける事ができます。

二つ目の魅力は、「成長の瞬間に携われること」です。毎日の授業はもちろん、運動会、音楽発表会、陸上大会などの学校行事を通して子どもたちは大きな成長を私たちに見せてくれます。Bさんは、陸上大会の選手を目指し、朝も昼休みも放課後もハードルの練習をしていました。私も、跳ぶフォームや走り方について、アドバイスをしました。目標記録に届いた時には、Bさんや周りにいた友達と一緒に喜ぶ姿を見て、私も自分自身のことのように喜びました。子どもの成長の瞬間に携われた時、教師としてのやりがいを感じます。

教師として、今も自問自答し続ける毎日ですが、それ以上に「なってよかったな」と苦勞を吹き飛ばしてくれる瞬間を子どもたちからたくさん貰うことができます。だからこそ、これからも子どもたちために、誠心誠意頑張っていこうと思います。

「教師になってよかった」と感じた瞬間エピソード

【子どもとの関わり編（中学校）】



43 先生ががんばらなきゃ

昭和の時代の終わり頃、最初の赴任先は浜松市の中学校だった。当時は校内暴力や非行の風が吹き荒れていた。赴任先の学校も生徒数が千人以上の各学年9クラスもある大規模校で長い歴史のある学校だったが、やはり荒れていた。毎日、生徒指導で一日が過ぎていった。当時、その学校は生徒の健全化を目指し部活動が大変盛んであった。私は学生時代に野球・陸上競技・サッカーの経験があったが、未経験のバスケットボール部、しかも女子部の顧問となった。

顧問となった時の最上級生は小学校時代に全国大会に出場したチームであった。しかしルールがわからない、練習方法がわからない、女子部の指導方法がわからない。とにかく全てわからない私であった。子どもたちの意欲は高い、こんな顧問であっても春の大会は県大会でベスト8であった。この子たちのために何ができるか。限られた時間の中で私は対外試合、合同練習会を毎週設定した。自分では”素人監督””初心者監督”としては「頑張っているな。」と自己満足していた。夏の大会が始まり、市内大会、西部大会、県大会と駒を進めたが、県大会はベスト8で敗退した。

会場の静岡市から学校に戻り、ミーティングをして解散。子どもたちは泣いていた。私も悲しかったが、「人並みにやれた」感もあり、ホッとした。部員が皆帰る途中に2年生のリーダーが私に言った。

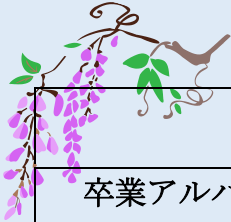
「先生ががんばらなきゃ、私たち勝てないよ。」

その後、どうしたのか記憶ははっきりしていない。しかし、その日の帰りに大量に関連本を購入した記憶だけは鮮明に覚えている。

当時、毎年のように全国大会に代表校を輩出していた浜松市内で優勝するのに3年かかった。2年生のリーダーはもう高校2年生となっていたが、市内大会優勝決定後、

「先生おめでとうございます。」

の一言を贈ってくれた。



44 卒業アルバムのメッセージ

卒業アルバムへ先生や友達からメッセージを書いてもらうという行事。いつ頃始まったのか定かではないが、この時私は教師になってよかったと感じる。

A子は、とにかく手のかかる生徒だった。お酒にたばこに茶髪に無断外泊、校則違反を繰り返す。先生にも親にも反発する困った生徒だった。中学3年生になり、当然のように私のクラスに割り振られた。指導する私と、徹底抗戦するA子。その攻防は、12月まで続いた。三者面談が終わり、周りの生徒がみんな受験する高校を決めた頃、A子が、

「先生、私も高校に行きたい。」

と言ってきた。「散々言っただろう、何を今さら訳のわからないことを言い出すんだ。」と怒鳴りたいところをグッと我慢して、彼女の話聞き、定時制高校への進学を目指すことにした。作文指導に面接練習。彼女は見たこともないくらいの真剣さで取り組んだ。無事合格を果たし、卒業式間際になって、彼女は申し訳なさそうな顔をしながら、卒アルを持って来て、

「先生、いろいろごめんよ、書いてくれる？」

と私に手渡してきた。

「ホントだよ、A子、よく俺に書いてなんて言えるな。」

冗談を言いながら私は、どの生徒にも書くいつものメッセージを書いた。

「祝卒業 過去が咲いている今 未来の蕾で一杯の今」

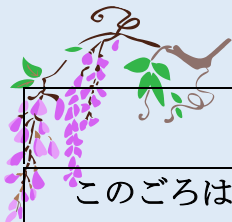
陶芸家の河合寛次郎さんの言葉だ。「今」の大切さを語る言葉はたくさんあるが、私はこの言葉が一番好きだ。努力した過去があるから「今」花が咲いている。そして、「今」を精一杯やっていくことが、未来の花につながっている。

「今」を大切にしなさいよというあたたかいメッセージだと思っている。

45 あの景色を見るために・・・

今から5年前のことである。私は、サッカー部の副顧問として全国高校サッカー選手権大会の決勝の舞台に立った。試合終了のホイッスルと同時に優勝が決まり、日本一となることができた。その時は、今までの部活に捧げた多くの時間が報われたと思え、充実感と達成感でいっぱいになった。さらに、部長が優勝インタビューを受け、我々顧問のために、優勝したかったということを聞いたときに、一緒に活動してきて本当に良かったと心から感じた瞬間であった。

最近では全国の舞台から遠ざかっているが、あの景色を見るために尽力していきたい。



46 「ロックソーランと法被」

このごろは、教育課程がきつきつで学級担任の自由になる時間がほとんどありませんが、このお話はまだ少し余裕があった頃のことです。

中学3年生の担任でした。その学校は三送会が二部構成になっていて、一部が後輩からのメッセージ、二部が三年生の出し物披露の時間となっていました。我がクラスはロックソーランを全員で踊ることに決めました。今ではどこでも踊られているロックソーランもまだはしりの頃で、踊り方を紹介したビデオをインターネットでなんとか探し当ててやっと手に入れました。そこからひたすら練習の日々。昼休みもイス机をすみに積み上げて全員で踊りました。勉強させるべき時期だったのでしょうが、クラス全員みんなで踊れることを楽しんでいました。

問題は衣装です。秋祭りの法被を家庭から持ち寄ることを考えましたが、誰かが

「作れないか・・・。」

と言いだし、自分たちで作ってみることにしました。膝ぐらいまである着丈の長い法被にしたかったのでかなりの量の布が必要でした。地元にある繊維工場に電話して端切れを分けてもらえないか交渉することにしました。運良く了承してくれたところが何件かあり、持ち寄った分と併せてなんとか集まりました。あとは制作です。2月で入試が終わった生徒を中心に放課後家庭科室でひたすらミシンを掛けました。協力してくれるおうちの人もいて、35枚縫い上がりました。

当日の舞台は本当に素晴らしかったです。自分たちで作った衣装を身にまட்டுて踊ったソーランは本当にかっこよくて、誇らしい表情は今でも忘れられません。

47 日々成長していく生徒の姿を身近に感じられること

私が教師になって良かった瞬間は、日々成長していく生徒の姿を身近に感じられることである。一人一人、成長の早さや表れはまったく違うモノであるため、指導や支援にはとても苦勞する。しかし、その苦勞が実を結び、生徒からの反応や態度で返って来たときに達成感や充実感を感じられる。その苦勞は自分の力に変わり、次の指導や支援に必ずつなげられる。また、普段全く会話ができない生徒が日記などで熱い思いや意外な一面を伝えてくれる。そのため、生徒の個性を知り良い指導へと導くことができる。指導の大きさに関わらず、生徒から「ありがとう」の気持ちが伝わることに喜びを感じる。



48 私が救われたひと言

新採4年目、初めて中学3年生の学級担任をすることになった。卒業後を考える初めての進路指導に加え、当時の学級にはいわゆる「やんちゃな生徒」もいて、その素行について指導が必要な場面も多かったため、経験の少ない私は、悪戦苦闘の日々を送っていた。

合唱コンクールが近づいたある日のことである。生徒たちが、教室で本番に向けて学級合唱の練習をしていた。当時の私は、3年生の合唱に対して、どこまで口を出してよいかかわからず、ただ黙って生徒たちの練習する姿を見ていた。しかし、代わり映えのしない合唱をだらだらと繰り返すばかりで、いっこうに練習は進まず、その場にいる誰もが苛立ちを感じ始めている様子だった。そこで私も意を決して、

「指揮者に集中しよう！」

とか、

「もっと表情豊かに歌おう！」

とか、

「体を使って表現してみよう！」

とか、解決すべき課題を生徒たちに投げかけた。徐々に学級への思いがあふれて、口調にも熱がこもっているのが自分でもわかった。すると、指揮者を任されていたA君が、私に向かって、突然声を荒げてこう言ったのだ。

「うるせえ、黙ってろ!!」

……全く思いがけない言葉だった。今になって考えてみれば、あの場面でA君は、「自分たちの力で何とかしたい。」という思いだったのだろう。その日は、A君のひと言に打ちのめされて、しばらくの間かなり落ち込んだことを今でも覚えている。

それから半年後、卒業式を終えて、学級の生徒たちが私の周りに集まってきた。皆清々しい表情をしている。その中で、A君が、おもむろにあの合唱練習での出来事について話し始めて、本当に申し訳なさそうに、

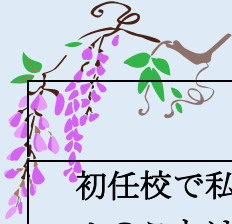
「あのときは、ひどいこと言って、ごめん……。」

と謝ってきたのだ。彼なりに半年間そのことを気に病んできたのだと思った。その一言に本当に救われた思いがした。

その後受け取った私宛の寄せ書きのA君のメッセージには、

「将来、先生みたいな教師になりたい。」

と書かれていた。



49 「A子との出会い」

初任校で私はソフトボール部の顧問となった。野球経験はあるが、ソフトボールのことは全くわからず、部活指導も初めてだったので、常に迷いを抱えながら指導していた。自分自身の指導に自信が無かったことと、県大会に出場したいという思いで、とにかくがむしゃらに部活指導した。厳しい練習の中、部員のA子は、体力も技術もなく、苦しい練習の時は毎回のよう泣き、全く練習について行けなかった。しかし、練習を途中でやめることはなく、他の部員と同じメニューを遅くなりながらも最後までこなした。あまりにも練習についていけなかったので、

「A子、途中で抜けて休んでいる。お前を待っていると他の子の練習にならない。」

と突き放すように言った。そうしたらA子は泣きながら、

「やらしてください。私はほっといていいのでやらしてください。レギュラーになって県大会に行きたいです。お願いします。」

A子の訴えを聞き、言葉を失った。そこから、昼休みもA子の練習に付き合い、一緒に努力してレギュラーとなり試合で貢献できるような選手となった。実力をつけ、努力した彼女をチームメイトも認めるようになった。

しかし、私が学校を異動することになり、彼女と一緒に県大会出場を目指すことができなくなった。A子が私に離任するにあたって手紙をくれた。

「先生と一緒に県大会出場をすることができなくなったけど、先生と県大会で必ず戦います。私も県大会に行きますので、先生も県大会に出場してください。」

その手紙が本当に嬉しく、異動した学校でも県大会出場を目標に練習に励み、互いに県大会に出場することができた。県大会では、戦うことができなかったけど、会場で会ったとき、感無量だった。そして、A子は引退し、卒業を迎えた。春休み、部活指導をしていた私の元にA子が卒業したことを報告にきた。色々な話をして最後に手紙をくれた。手紙には、

「私の将来の夢は、中学校の先生になり、ソフトボール部の顧問になって先生と戦うことです。それまで、ソフト部の顧問でいてください。」

このメッセージが今でも私の心の支えとなっている。

そんなA子が、中学校の教員採用試験に合格し、中学校の先生をやっている。ソフト部の指導はしていないが、私は、またどこかで会える日を楽しみにしている。そして、「教師になってよかった」と心から思った。



50 教師としての2020年

私の教師1年目は、新型コロナウイルスの影響で様々な行事が変更されたり日常が大きく変わったりと例年とは違う生活でした。全てが初めてという不安と、この状況で生徒とどう生活していけばいいのかという不安を抱えながらの始まりでした。しかし、そんな私の不安を吹き飛ばしてくれるくらい元気に生活している生徒達の笑顔がありました。今も、生徒の見せてくれる笑顔に頑張ろうと勇気づけられる毎日を送っています。

私の担当科目は家庭科です。全校生徒と関わることのできる教科として、難しさを感じる時もあります。しかし、驚きや学びのある毎日に充実感を感じています。一人ひとり違った表情や考えに触れ、授業の内容も私の世界も広がっていくことを実感します。嬉しいのは、生徒が、

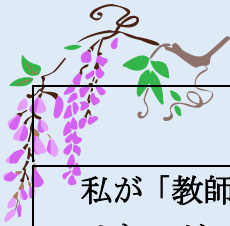
「今日は家庭科がありますね。」

「今日は何を勉強するんですか。」

と楽しみにしてくれていることを感じた時です。教師として、生徒のためにもっともっと成長したいと思える瞬間です。

また、部活での関わりにもやりがいを感じます。授業や学校生活ではなく、楽しさや苦しさを共に経験し生まれた関係には親近感や緊張感があります。

たくさんの生徒との色々な関わりの中で、今私は楽しく過ごしています。魅力的な教師になれるよう、もっともっと努力していきたいと心を燃やしています。



51 結婚式のメッセージ

私が「教師になってよかった」と感じた瞬間は、たくさんある。大きな出来事ではないが、ささいな出来事、ふとした瞬間に感じることが多い。

新採の頃の話だ。担任として受け持った生徒とけんかばかりの日々。どんな風に生徒指導したらよいかもわからず、とにかくがむしゃらだったようにも思う。先輩教員のように、上手にあしらうこともできず、厳しく指導しようとしても反抗にあうばかり。なんでこんなにもめてしまうのかと、自分自身を責めた日もある。気がつけば、その生徒たちは卒業した。

何年か、教員生活を続けたある日、結婚式の招待状が届いた。いつもけんかしていた生徒からだ。迷わず出席した。その席には、彼女からのメッセージがあった。

「中学時代、ある意味、一番印象に残っている先生。いっぱいけんかしたね。反抗的な態度でたくさんしかられたね。本当にしつこくて……。でも、一生懸命なことはわかったよ。……」

といった内容であった。思わず笑ってしまった。そのしつこい先生を晴れの日に呼ぶなんて。でも、一生懸命に彼女とぶつかってきたことが間違っていなかったことを感じて、とてもうれしかった。その後も彼女からは毎年、年賀状が届く。家族が増えていく様子やすっかり母らしくなった顔で写っている写真年賀状。元気にやっていることを感じてとてもうれしい。これが、私が、「教師になってよかった」と感じたエピソードの一つだ。

52 掛川で、生徒の成長を

私にとって教師になってよかったことは、2つあります。

1つ目は、生徒の成長を目の当たりにしたときです。授業の中で生徒が「わかった」や「できた」などの言葉を聞いたときや行事で生徒とともに競技や合唱の練習に取り組み終えたとき、卒業式で大きく成長した姿を見たときに教師をやっていてよかったなと感じます。

2つ目は、自分の生まれ育った掛川で仕事ができているということです。自分が今までに培ってきたもの生かし、微力ながら地域に貢献できていることにとても喜びを感じます。これも、教師をやっていてよかったなと感じる瞬間です。



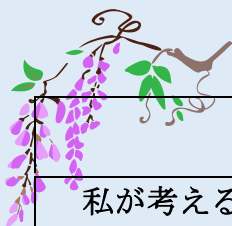
53 会えてよかった。

中学1年生。新生活への期待に胸を膨らませて入学してきたその翌日、担任の私はいきなり叱った。2度も。理由は、集会への参加・移動は整然と行うものだと言っておいたのにちょっかいを出し合う生徒がいたこと。もう一つは、人の話は、たとえ放送であっても静かに聞くように指導したにも関わらず、大切な放送中にへらへらと笑っている生徒がいたこと。少し厳しいかとも思ったが、人と人とが関わる社会において、中学校では周りのために自分にできることに精一杯取り組むという集団生活を学んでほしい。そして1年生のうちからその素地を築き、2年後に立派な3年生になってほしいという願いを胸に、指導方針を変えなかった。ただ、平等に厳しくしないといけないのはわかっていながらも、複雑な事情を抱えている生徒、精神的に弱い生徒には、配慮をしなければならない。それが生徒に不公平と捉えられないかという不安もあった。

しかし、不安とは反対に、クラスは団結していった。授業前の明るい挨拶。学年で一番早く揃う提出物。出席率の高さ。安定した授業のA評価。3年生よりも速い給食の準備。「弱い子」に対して全員で優しくできる雰囲気。体育祭や合唱祭といった行事にも練習から一生懸命だった。合唱祭で惜しくも2位になったときは1年生なのにみんなで泣いた。周りのために自分のできることに精一杯取り組むこと、1つのことに向かって全員で熱くなれること、個性を認めて全員が輝けること。壁はたくさんあったけれど、みんなで乗り越え、最高のクラスになったと思った。私はその子たちが2年生に進級するのを見届けることなく異動となった。

およそ1年後の2月。私の誕生日にビデオレターが届いた。異動して1年が経っているのに、私の誕生日を覚えていてくれて、全員が昼休みに集まって動画を撮ってくれた。当時の学級委員が、

「先生は最高の先生です。会えて本当によかったです。」
と言ってくれた。目頭が熱くなった。あなたたちこそ、最高の生徒であって、会えて本当によかったと心から思えた瞬間だった。



54 教師になってよかったこと

私が考える教師の魅力は「感動」の一言に尽きます。その感動はもちろん子どもたちが与えてくれるものです。例えば体育祭や合唱コンクール、部活動などで、皆が同じ目標に向かって努力を重ねることで、それに見合った結果を残したり賞をいただいたりするのには大きな感動があります。たとえ結果は出なくてもクラスやチームが一丸となる姿は本当に美しく尊いものです。そういった場に立ち会うことができるのは教師としての喜びです。さらに何気ない日常の中でも子どもたちはたくさんの感動をくれます。授業で課題が解決し、

「わかった！」

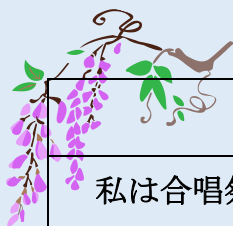
と目を輝かせる姿、クラス全体のことを考え積極的によびかけを行う姿、元気がない友達を心配して声をかける姿、教え上げればきりがありません。そして日を追うごとに成長していく姿を見ることができるのも教師の魅力ではないでしょうか。

クラス解散の日さらに卒業の日、

「先生が担任でよかったです。」

「先生と同じ教師を目指します。」

という言葉をかけてもらったことがあります。大きなやりがいを感じると同時に、否が応でも子どもたち一人一人の人生に少なからず影響を与えたことを痛感させられます。責任の大きさに身の引き締まる思いがしますが、そのように毎年「人にもものを教えることの意味」を再確認する機会があるからこそ、長く続けていけるのかもしれませんが。私はアルバイト程度でしか他の職種の経験がないため、正直「教師になってよかった」と思ったことはありません。きっと退職後、じわじわとそう感じられるのではないかと今から楽しみにしています。



55 時間を共有し、思いを共有すること

私は合唱祭が大好きです。生徒と一緒にになって昼休みや放課後に練習を重ねます。中学生ですから、練習に集中できなくてふざけたり、そういう生徒に腹を立てて怒ったり泣いたり、いろいろなトラブルが起こります。いろいろな時間を過ごしながらいよいよと上達していき、本番を迎えます。

当日、朝の練習から本番、結果発表まで、心はクラスの生徒と一緒にです。クラス全員が同じ思いで同じことを夢見て、数時間を過ごします。

私が一番心が温くなる時間は、次の日の朝、教室に入ったときです。結果がよかったときも残念だったときも、そこにあるのは同じ時間・同じ苦勞・同じ思いを共有したものだけにわかり合える、ほんわかとした空気と生徒たちの笑顔です。どんな結果であっても、お互いがわかり合えているという安心感に満ちた表情です。教師と生徒の枠を超えて、「ああ、ここにわかり合える安心できる場所がある」と強く感じます。

その後、数ヶ月すれば学級は解散し、生徒たちはまた新しい仲間や先生と新しい思い出を作っていきますが、そのときに感じた空気感はずっと心に残っていて、私の心を温めてくれるのです。

56 感動を与えてくれた生徒たち

10年程前、ある中学校の女子の部活動を指導していた時のことです。女子指導が特に得意なわけでもなく、その部活動のスポーツも経験したことはありませんでした。練習は、走らせることばかりで、練習方法として有効であったかどうかは疑問ですが、生徒たちは素直についてきてくれました。

夏の大会では、シードされたチームにも勝つことができ、共に喜んだことを覚えています。現在でも、あのときの生徒たちの直向きな姿、純真さが忘れられません。私は、感動を与えてくれた生徒たちのことを思い出すたびに、教師になってよかったと感じています。



57 未来は今日の中にある

部活動の時間、体育館前に整然と並んだ靴を見るとなんだか気持ちがすーっとします。「凡事徹底」「履き物をそろえると心もそろろう」「誰にでもできることを誰よりもやりきる」と言いますが、なかなか難しいものです。

以前部活動で関わった教え子に再会し言われたことがあります。

「彼女の家に行ったとき、玄関先の靴をそろえたら彼女のお父さんにめちゃくちゃ褒められた。先生に教えてもらったことが、初めて役に立った。」

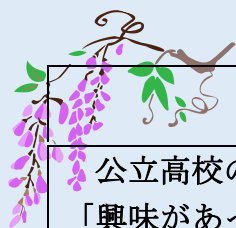
「未来は今日の中にある」ことを学ぶのも部活動のよさのひとつかもしれません。蒔いた種がいつかそっと花開くことがある。教師ってやっぱり素敵な仕事だなあ。

58 教師という仕事は本当に面白い

中学校の教師になること。これは私の中学2年生の時から夢であった。教員採用試験に合格し、晴れて教員として採用された。初任校は母校への配属となった。教師として中学生と関わること。授業を行うこと。部活動を指導すること。それ以外の業務をこなすこと。そのどれもが初めてのことだった。教師になり教壇に立つことを夢見て、実現したが現実には本当に厳しいものであった。生徒と上手く関われない。授業は上手くいくはずもない。一日一日を過ごすことにあっぴあっぴになっていた。自分のイメージしていた生徒たちと楽しそうに関わっている教員。そんな輝いている教師というイメージとはかけ離れているものだった。

仕事に慣れ始めたころ。周りが少し見えるようになり、余裕も生まれ生徒たちと関われるようになってきた。体育祭、合唱祭などの行事や日々の生活指導を全力で生徒たちと向き合い関わる中で生徒たちも自分自身も成長することができた。3月の学級解散の日に生徒たちからもらった手紙。4月からの生活は楽しかったことよりも辛かったり、大変だったりすることの方が圧倒的に多かった。でも、この一時に救われた気がする。

教師という仕事は毎日何が起こるか分からない。自分が予想をしていないような良いことも悪いことも起こる。生徒たちの成長をこんなに近くで感じることでできる教師という仕事は本当に面白い。「教師になってよかった」と思う。



59 土台作りに関わることができたと思えた時

公立高校の入試が終わった3月のことです。

「興味があったドイツ語の勉強を始めました。」

とある生徒が教えてくれました。また、ある生徒は

「ハンガルの勉強を始めました。」

「料理人を目指してイタリア語の勉強を始めて、英語と同じ言葉があることを知りました。」

と教えてくれました。語学の教師として、これらの言葉はとても嬉しいものでした。3年生の3月、入学試験も終わり、受験勉強から解放された時期では勉強することをやめてしまいがちですが、そこから自分の興味をもとに新たな学習を逞しく始める姿が見られました。彼らはただ自分の興味に従って外国語の勉強を始めたのだと思いますが、学習途中で言葉に関して気が付いたことや、外国語学習の中で気づいた自分自身の新たな一面について実に楽しそうに話してくれました。

英語の教師として生徒には外国語の知識や技能を身に付け文化や考え方を知ってほしいと思っています。しかし、それ以上に言葉を通して自分自身を見つめ、他者の考えや心情を受け取り、自分自身と、他者と、自らを取り巻く世界と関わる姿勢を大事にしてほしいと思っています。私は言葉の学習は入試のためにあるのではなく、ましてや点数を取るためではなく、自分という存在と他を繋ぐためにあると思っています。中学校で自らが取り組んだことを基に、そこをスタートラインにして自分自身がやりたいことを見つけ、歩き始める生徒を見た時には応援せずにはいられません。13歳から15歳の間に考えた「自分」という存在、そしてそこで気づいた「自分自身」、これらを土台にして歩き始めた彼らの背中を見た時、そしてほんの少しだけでも土台作りに関わることができたと思えた時、私は嬉しく思います。



60 「教師になってよかったと思う人間」

この職業には2種類のタイプの間人しかいません。それは「教師になってよかったと思う人間」と、「教師になって失敗したなと思う人間」です。自分もともと前者だったのですが、そこには大きな落とし穴がありました。

中学時代の適性検査で、なんとなく評価の高かった公務員。それがきっかけで教師になることを目指しました。もちろん、中学時代の先生たちが学校を秩序と安全の保たれた場所にしてくださったことも、教師を目指した理由になります。教師として過ごした最初の年。わからないことだらけでしたが、自分なりに一生懸命やりました。年齢が若いこともあり、子どもに寄り添い一緒になって、毎日の生活や行事にがむしゃらに取り組みました。自分が成長していることに「ああ教師になってよかったなあ」と感じてやりがいを見いだしていましたが、これが落とし穴でした。自分にとって不都合なことがあると、どうしても受け入れられない。保護者の顔が見え、指導に一貫性をもてない。「教師になって失敗したかな」と思う時期もありました。

こんなことがありました。いろいろな卒業生が自分に会いに学校を訪れてくれるのです。

「先生のおかげで学校に通えています。」

「先生を見て教員を目指しました。」

「大学に受かりました。」

「最近高校でこんなことがあってー。」

など、担任をしたことのある生徒だけでなく、1年だけ授業を受け持った生徒や、部活動の卒業生も学校に会いに来てくれました。そのとき、自分たちは生徒たちの未来を創っていかねばいけなあと深く思いました。

人間なのでもちろん、仕事をしていて嫌だなあと思うこともあります。そんなとき、自分の成長だけでなく、生徒たちの未来を作っていることを考えるとこんな職業はないなあと感じます。教職員を目指している若い皆さん。楽しいことばかりではありませんが、私は「教師になってよかったと思う人間」です。この職業には2種類のタイプの間人しかいません。あなたは、どちらのタイプの人間ですか？



61 生徒からもらう言葉

教員になって7年が経った。私は中学校で生徒たちに国語を教えている。自分が大好きな国語の楽しさ、面白さを生徒にも感じてもらいたい。そして国語を大好きになってほしい。そう思いながら日々授業をしている。

どうしたら生徒にとってわかりやすい授業になるのか。資料をどう提示すれば興味を引くか、など試行錯誤しながら授業を考えてきた。実際にやってみて、「失敗したなあ。」とか、「ここをもっとこうすればよかった。」と思うことも多い。しかし、

「先生の授業は楽しいから好き。」

「〇〇が面白いと思った！」

「すごくわかりやすかった。」

という言葉を生徒からもらえたとき、報われたような気がする。嬉しさがこみ上げてきて、「もっと良い授業ができるようにがんばろう。」と思える。

62 私のエピソード

○中1の時担任した生徒が母親との関係で悩んでおり、私が話を聞いていた。卒業し、大学生になった今でも親交があり「先生がいたから学校に通うことができた。ありがとうございました。」と言われた。

○部活で反抗ばかりしていた生徒がおり、在学中は何かとぶつかることが多かったが、卒業して高校生になって試合で偶然会ったときに、わざわざ「こんにちは、今は高校で～を頑張ってます。」と挨拶してくれた。中学にその生徒の弟が入学してきて、教師に注意されたとき、「兄ちゃんが『中学校時代しかそんな風に注意してくれる先生はいないのだから、ちゃんとしろよ。』と言っていた。」と言っていた。

○中2の時に担任していた生徒とコンビニでたまたま遭遇。あちらの方が覚えていた。「俺、続けている〇〇で大学合格したんですよ。将来は保体の先生になりたいです」と言われたので「一緒に働くのを楽しみにしている」と答えた。他にも夏休みを使ってコンビニでアルバイトをしている教え子に会い、「もう、働いているのか」「ちゃんと働けるような人になるように、わたしも一役買ったのかな」と思った。

○同僚との飲み会で、居酒屋に入ったとき、教え子（成人している）が働いていた。注文をとって、お酒を出している姿を見たとき、なんだか感慨深かった。



63 「養護教諭でよかった。」

教師という職業の醍醐味は、子どもと関わっていく中で日々変容していく子どもの姿を見て取れる所だと思う。特に養護教諭は、友達関係、学力低下、家庭の問題などに悩みを抱えている子どもとの関わりが多く、中学生にもなると、関わりによる変容が直ぐに現れる場合と卒業後に分かってくれる場合など、人それぞれで面白い。

以前私は、保健室登校の生徒のことで心療内科の医師に相談した折、その医師から、

「養護教諭が学級担任と同じ対応をしていたらだめだ。学校内で、不適応をおこす子どもは、校内でのキーパーソンが必要で、それを担うのが養護教諭の役目ではないか。」

と厳しい御助言を受けたことがあった。また、先輩養護教諭から、「教育技術は関わりから生まれる。」

という言葉をいただき、子どもへの関わり方を見つめ直した。

その後の私は、時にはがっつき関わったり、時には距離を置いたりしながら、困難に立ち向かう子どもたちと併走してきた。自分の関わり方が正しかったと分かる時があれば、失敗だったと子どもの表れから判断できる時もあった。しかし、時を経て卒業時に、

「先生、俺、あの時は強がっていてよくない態度でした。」

とか、

「あの時は、わがままを言ってごめんなさい。」

と手紙に書いてくれたり、

「高校を無事に卒業しました。」

と親子で挨拶に来てくれたりした時は、つくづく「養護教諭でよかった。」と思う。また、

「先生、保健委員長をやってから養護教諭の仕事に興味を持ったので、養護教諭養成大学へ進学します。」

と卒業生から連絡を受けた時はこの上なく幸福感を感じた。



64 「跳べた！」

小学校の頃から教師になろうと思っていたが、大学を選ぶときに得意な国語にするか好きな保健体育にするかを迷った。長年やるなら好きなものと保健体育を選んだ。好きだけど得意とまではいかないので、子どもの頃からスポーツが得意な友達をよく見て、

「どうしたらあのようになれるだろう。」

と考えながらやっていた。だからできない子の気持ちはなんとなくわかっていった。

実技種目のなかでも跳び箱運動は出来不出来がはっきり出てしまう。

「小学校の時には跳べなかった。」と最初から消極的な生徒もいる。

「その子たちに見たこと感じたことのない世界を見せてやるぞ。」

と意気込んで教材研究と実践を繰り返した。そのうちに跳び箱を跳ぶために必要な心技体を授業でつけさせるにはどうしたらよいかだんだんわかってきた。一番難しいのは技の神経系の反射の刷り直しと心の恐怖感を取り除くこと。これは全体の授業も進めながら個に応じて支援をしていくことでクリアさせる。

その年もやはり、

「私は跳び箱なんて跳べっこない。」

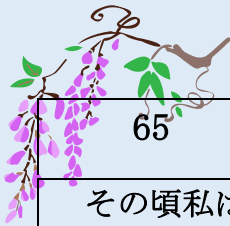
と思い込んでいる生徒がいた。10時間計画の8時間、リズムカルな助走から安定した踏み込み、踏切で第一次空中局面に体が軽やかに浮き、肩を支点とした重心移動から第二空中局面、そしてちょこんと着地した。

フィニッシュのポーズを約束通り決めてから振り向きざまに、そして顔を涙でぐしゃぐしゃにしながら私に飛びついてきた。

「跳べた～、人生で初めて跳べた～。絶対無理だと思っていたのに跳べた～。」

「ちょっとだけその子の人生に色を添えられたかな 跳んでる最中、今まで見たことのない景色を見られたかな。」

と満足感がこみ上げてくる瞬間である。



65 「何で私たちがこんなこと言われなきゃいけないの」

その頃私は27歳の青年教師だった。その学校はまだ昭和時代の荒れを引きずっていた。私が顧問をしている部活のA子が相談に来た。A子は塾で他校の生徒に言われたことを泣きながら話してくれた。

「あなたの学校ってワルがいっぱいいて荒れてて怖いんだってね。あなたも本当はワル？ こわ〜い。」

そう隣の中学の生徒から言われたと泣きながら語ってくれた。

「何で私たちがこんなこと言われなきゃいけないの。そういう人もいるけど私たちはこんなに頑張っているのに。」

と訴える彼女に私はその時何も言ってあげられなかった。

こう思っている生徒は当然他にもいるはず。でも、自分には何ができるのだろう。27歳の私は、

「この子たちが他校に誇れること、良いことで認められることをつくってあげるしかない。部活動でこの子たちが自慢できるようなチームにしよう。他校にすごいねと言ってもらえるチームに。」

と決意した。

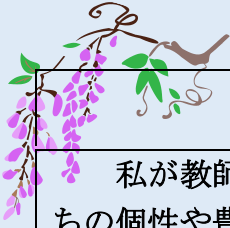
全員が初心者チームは日々の練習での切磋琢磨から始まり、練習試合では30人の上級生全員を出場させ成果を競い合わせた。A子を含むチームは日々の練習から試合の気持ちでチームメイトとも、そして試合では他校ともしのぎを削り実力を高めた。

新人戦を勝ち上がる中、小学校から競技経験のある生徒が進学する中学校とも熱い戦いを繰り返し、新人戦県大会準優勝、東海大会第3位を獲得した。表彰式でのA子、今度は満面の笑みで涙を流していた。

その春、新入生を迎え部員は80人を超える大所帯となり、A子を含む上級生は学校の中でも中心的リーダーとなっていた。

そしてA子は今、2児の母として、そして教師として充実した日々を送っている。

本当はもっとここでは書き切れないくらいの「テレビよりドラマな話」はいくらでもあります。教師という職業は日々がリアルタイムなドラマです。



66 この仕事でしか得られない感動や悔しさ

私が教師になってよかったと感じた瞬間は美術の制作活動を通して生徒たちの個性や豊かな発想を発見できることです。課題を悩んで諦めずにやり遂げる姿を見ると感動します。想像した以上に頑張る姿や作品を見ると今まで伝えてきたことが無駄では無かったし、少しは伝わっていたのかなと思えることはとても前向きな気持ちになりますし、この次はもっと充実した授業をやりたいなど自分の気持ちの成長にもつながります。

私は教員になる前は違う仕事をしていましたが、この仕事は責任が重く生涯勉強をし続けなければならない厳しい仕事ですが、この仕事でしか得られない感動や悔しさがあると思えました。特にこの悔しさが私には大切で、この次はもっと自分の生きる姿勢に重要な要素になっていると思っています。

67 「彼女の心の成長に涙が出た」

「歌い終わったとき、悔しさも達成感も感動も何も感じなかった。」

これは、合唱祭が終わった後の彼女の感想だ。当時の彼女は、一生懸命やることは格好悪いことという考えがあり、練習にも手を抜いて取り組んでいた。

2年生になり、運良く彼女の担任になった。今年こそ最優秀賞をとると意気込んでいた私は、学級合唱練習にも気合いが入った。彼女は周りのクラスメイトの一生懸命な姿を目の当たりにし、初めて「私もしっかり歌おう」と決意した。一生懸命練習に取り組んだ結果、最優秀賞をとることができた。結果発表のとき、祈るように手を組む姿、最優秀賞だと分かったときのあの嬉しそうな表情は今でも忘れられない。合唱後の彼女の感想には、

「初めて私は、歌う楽しさや、仲間と困難を乗り越えていく大切さを知りました。」

と書いてあった。仲間の姿が彼女の心に変化をもたらした。1年時の姿を見ているからこそ、本当に嬉しかった。生徒の成長を間近で感じたり、見ることができたりするのは教師の醍醐味だと感じた。一緒に喜んだり、一緒に悔しがったりできることは本当に幸せなことだと気付いた。

合唱祭後数か月経ったある日、同僚から、

「あの子、担任の先生に恩返しをしたいから、来年は副推進委員長をやりたいて言っていたよ。絶対に言わないでくださいって言われたけどね。」

と彼女が言っていた話を教えてもらった。改めて担任っていいなと感じた。



68 この職業のやりがい

教師を目指したきっかけは小学校5年生の担任の先生でした。生徒一人ひとりをよく見てくれ、そのときに必要な言葉をかけてくれ、幼い心ながら、「自分をしっかり見てくれる。」と感じていました。自分の父が教師をしているということもあり「教師」という職業を身近に感じていたためかも知れませんが、自分もこんな先生になりたい、と思い始め教師という職業を目指しました。

自分が教師として働き始め「こんなに色々やることがあるのか」と生徒の立場では分からないことが見えてきました。2年目からは担任も任され、今まで行ってきたことに加えて、担任としての業務も重なりました。実際に生徒の様子を十分に見ることもできずに過ぎる日々。「これでいいのか？」と思うこともありましたが、

「先生の授業は丁寧にやってくれるのですごく助かっています。」

「部活で悩んでいるときに先生に話を聞いてもらえて、とても助かりました。」

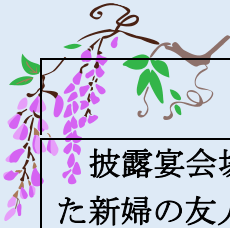
「先生が私の趣味を理解してくれるから、素の自分で過ごすことができました。」

3月の終わり、生徒がくれたコメントを見て、「自分が懸命にやってきたことにも意味があり、生徒に伝わっているのだ」と感じ「教師をやっていてよかったな」と感じました。

中学校卒業後も地域の行事や、町中で見かけると、

「先生！」

と声をかけて近況を報告してくれる姿を見ると嬉しく思います。中学校だけの関係ではなく、同じ一人の人として繋がりができることも「やっていてよかった」と感じます。3年間という短い期間の中でも大きく成長をしていく姿を見られる。この職業のやりがいであり、やってよかったと思えます。



69 「披露宴」

披露宴会場。受付で席次表をもらって自分の席を探す。同じく受付を済ませた新婦の友人3人組が同じ席次表を見ながら盛り上がる。

「えー、新郎の恩師だって。」

「恩師って何？」

「学校の先生だって。ウケるー。」

爆笑。最近の若者は中学校時代の恩師を自分の結婚式に呼ぶことなどあまりないと見える。

「それは俺のことだ。」

と名乗り出るわけにもいかず、一気に肩身が狭くなって気配を消そうとしたそのとき、新郎の友人登場。学ランこそ着ていないものの、かつてのヤンチャな雰囲気が漂っている。

「先生、お久しぶりです。」

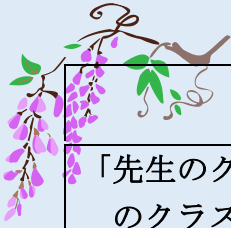
「お元気ですか。」

「今日、スピーチあるんでしょ。期待してます。」

一気に自信回復。見たか、新婦の友人。僕はここにいていい人間なのだ。そして、披露宴開幕。スピーチでは、イタズラして僕に指導された後、迷惑かけたそのお詫びにと、父親と二人で休日に延々と学校の草を刈っていた新郎の中学校時代の思い出を話した。たいしたスピーチはできなかったが新郎新婦とその父親は感激し、泣いていた。そして、席に戻ると新婦の友人3人が僕のグラスにビールを注ぎながら、

「先生っていいですね。」

と言ってくれた。教師になって良かった。



70 「ありがとうございます。」

「先生のクラスでほんと良かったです、ありがとうございます。中学校でもこのクラスと同じメンバーだったらいいと思っています。」

これは、昨年小学校6年生のある児童の保護者からいただいた言葉だ。

私は昨年に小学6年生の担任をし、翌年そのまま受け持った6年生とともに同じ中学校区の中学校に赴任をした。初任のとき担任をした小学3年生を4年生、6年生と担任し、中学1年生で受け持つこととなった。連続して担任をすることは不安が多く、「子どもはこちらを振り向いてくれるか。」と思うこともあった。6年生をうけもつとき、中学年とは違う心の発達を感じ、指導の仕方や関わり方によく悩んだ。それでも、悩む気持ちと同じくらいこどもの成長に感動することがあった。自分たちでクラスの問題を解決しようとする姿や、不格好ながらも一生懸命話し合い、協力して活動する姿をみると、年月の大きさを感じ、涙を流すほどの感動がそこにあった。

「先生、楽しい1年でした。3年間も受け持ってくれてありがとうございます。」と、コロナウィルスの影響で短縮され時間のない卒業式の中子ども達から言われた。この瞬間、今まで不安に思っていたことが嘘のようにどこかへ行ってしまった。

その子ども達と4年目の学校生活。今年も大きな感動があるだろう。



71 やれることがあると証明できたこと

私は、小学生の時に抱いた「教師になりたい」という夢を、中学生で「教師になる」と強い決意に替え、実現させました。生徒とのかけがえのない時間が充実する一方で、授業や学級経営、部活動などの悩みは尽きません。

中でも、私が最も頭を抱えたのは、合唱指導でした。それまで私は歌うことがトラウマで、歌うことに対して見向きもしませんでした。合唱が大好きな生徒やハイレベルな合唱が伝統の学校、合唱を楽しみにしている保護者。強い心で立ち向かって負けるような弱い自分に寄りかかってしまうことがありました。そんなとき、

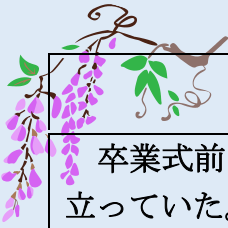
「歌うのが苦手で、うまく歌えません。どうしたらいいですか。」

と私に悩みを打ち明けた生徒がいました。確かに、その生徒は口をあまり開けず、首をかしげながら練習に参加していました。そんな生徒に、

「悩むほど歌と向き合い、苦手をごまかさずに克服しようとするあなたは、私と比べものにならないほど立派です。」

と答えました。質問の答えにはなっていますが、苦手でも頑張ろうとする姿勢に心から感動し、出た言葉でした。「全員が安心して歌えなければ、いい合唱はできない。」と中学生の頃に考えたことを思い出しました。私にとって、張り詰めた空気で行われる練習ほど、やる気の出ない時間はありませんでした。そこで、リーダーたちに温かい声かけをすることと笑顔で練習することを徹底させました。すると、少しずつ学級には笑顔が増え、悩んでいた生徒もはにかみながら歌うことが増えました。できないことがあるからこそ、自分にもやれることがあると証明できたと感じました。

私は数え切れないほど多くの方々に影響され、ここまで来ました。苦しい環境下でも種は人知れず芽吹き、たくましく成長し、凜とした花となり、やがて種をつくる。そうして、多くの人をつなぐひとつの大きな環になっていく。そんな教師であり続けられるよう、邁進していきたいと思います。



72 そうだ、感動しよう

卒業式前日、最後の学級活動のため教室に行くと、生徒たちが合唱の並びで立っていた。曲は「名付けられた葉」。一人一人が個性的で、自分らしく生きて欲しいという願いを込めた曲。3年間を思い出し、そして卒業を見送る寂しさから涙が止まらなかった。合唱への取組みは、生徒も教師も大変で本当に苦しいが、乗り越えた時に得られる感動は何物にも代えがたい。生徒たちにはこの大きな感動を経験して欲しいと思ってきたと同時に、自分も共に乗り越え、涙を流してきた。こんなに心が震える体験は大人になってなかなか得られない。初めて卒業生を送り出した思い出の曲も、今でも耳にすると目頭が熱くなる。

合唱と同じくらい感動をもらったのは、部活動である。汗と涙、どれくらい流してきただろうか。生徒と共に全てを掛けて取り組んできた。集大成の夏の大会、自分の鼓動がわかる程の緊張と、血の気が引く程の不安の中で戦い、大きく喜び、真っ白になって大粒の涙を流した。悔し涙か、達成感の涙かはわからないが、そこには大きな感動があった。

生徒と共に得る感動、それは映画やドラマ、ドキュメント番組では得られない、生の、教師でなければわからない感動である。教室、グラウンドで共に汗を流し、壁を乗り越えなければわからない、そう、観客席では絶対に得られない感動である。教師は一見、知的で冷静に見えるが、こんなにも熱く、心が震える職業は他にない。

最後に一つ、感動を共有した卒業生たちとは未だに交流があり、個性的に成長している姿を見せてくれている。感謝、感謝であると共に、まだまだ感動は続いている。



73 共に考えるという愉しみ

ある生徒が紹介してくれたアーティストの書いた歌詞が、今年私の頭でずっと流れている。

《ああ 答えがある問いばかりを教わってきたよ そのせいだろうか
僕たちが知りたかったのは
いつも正解など大人も知らない
喜びがあふれて止まらない夜の眠り方
悔しさでにじんだ 心の傷の治し方
傷ついた友の 励まし方》

教師である私は、すべての答えをもっていない。そんな私が関わる生徒たちは、人生の中の様々な答えを求めている。その中で私ができることは、「一緒に考える」ということだと思っている。一緒に考えているとき、教師と生徒という枠組みがなくなり、ともに考える「仲間」になる。私はこの「仲間」になる感覚こそが、教師の醍醐味だと感じている。授業で、部活で、学校生活の様々な場面で「仲間」となれた瞬間が積み重なっていく。一緒に未来を考える。答えがわからないことを考える。それがなにより楽しい。そして、それを一緒に楽しめる生徒がいることがうれしい。

私は教師になったばかりなので、まだまだ経験が足りないことも多くある。今、一年目を過ごして思うことは、予測困難な未来を生徒と楽しく生き抜ける教師になりたいということである。答えを教える教師ではなく、答えを生徒と共に考える教師をこれからも目指していきたい。



74 卒業生との関わり

私が教師になってよかったと感じた瞬間はたくさんありますが、その中でも特によかったなと感じたものは卒業生との関わりや交友関係です。

私は趣味で陸上競技をやっているのですが、大会や記録会等で陸上競技場によく足を運びます。その際に陸上部で指導していた生徒や担任していた生徒に会うと必ずあいさつをしてくれます。

「この前の大会でベストができました。」

「東海総体に出場が決まりました。」

等の陸上の結果報告や、

「高校生活楽しいです。」

「高校ではこんな行事がありました。」

等の学校生活の様子を楽しそうに話してくれます。

「中学の時に先生から陸上部に誘ってもらって良かったです。」

「中学の時の部活楽しかったです。」

等の中学校時代の思い出話をしてくれたり、感謝してくれたりすることもあります。卒業してからもあいさつをしてくれたり、話しかけたりしてくれると、こちらもとてうれしく思います。中学校を卒業してからも真剣な話からくだらない話まで様々な話ができるのも中学校の教師の魅力の1つだと思います。もちろん中学校に在籍していた時にもたくさん話をしていますが、卒業してから色々な話をすると、人間的に大きく立派に成長した姿を実感します。そんな成長に少しではありますが関わることのできる中学校の教師になってよかったと日々感じています。

また、これから自分が長く働けば働くほど教え子の人数は増えていきますので、卒業生との関わりはどんどん広がっていきます。その交友関係は今後の自分の財産になり、残っていくものなのでそういったものも中学校の教師の魅力であり、教師になってよかったと感じる瞬間だと思います。



75 初めての体育大会

今年は新型コロナウイルスによる休校の影響で、私達初任者にとっては異例づくめの初年度となりました。学校行事はことごとく延期・中止となり本校の体育大会も、本来6月に実施するところを今年は9月に延期となりました。

そして夏休みが明けた8月末、残暑厳しい中体育大会に向けた練習の日々が始まりしました。最初は体育大会など十数年ぶりの自分が、優勝を目指して気持ちの焦る生徒たちにどんな言葉をかけ、競技の指導をどのようにすればいいのかわからず生徒との距離を感じてしまうこともありました。それでも、毎日慌ただしく競技の練習をし、自分なりに励ましの声をかけていく中で、徐々に記録が伸びていく様子や学級が団結していく様子を見て生徒たちの成長を間近で感じ、嬉しく思っていました。そんな中、合同初任者研修の通知が届きました。実施日を見ると、何と体育大会当日でした。

「まさか教員人生初めての体育大会に立ち会えないとは・・・。」

生徒たちにいつ、どう伝えれば良いかわからないまま、毎日が過ぎていきました。当日自分がいないことを生徒たちに伝える決心をしたのは、その2日前のことでした。帰りの会で、

「え～！！」

と驚く生徒たちの反応に少し安堵しつつ、当日は研修会場から応援している、今まで練習してきた自分達の力を信じて頑張ってきてほしいと生徒たちに伝え、生徒たちを送り出しました。それから、自分にできる事はないかと考え、黒板に応援のメッセージをしたため、私の似顔絵に赤組のTシャツを着せた即席の「かかし」を作り、教室に置いておくことにしました。

そして研修終了後、すでに生徒たちは下校していましたが急いで教室に戻った私の前にあったものは、黒板に書かれた

「先生勝ったよ！」

「優勝できました！」

「かかし似てた！」

という温かいメッセージでした。また、後で見た写真には、笑顔でかかしを振って応援する生徒たちの写真が沢山写っていました。学級対抗リレーは1位、長縄飛びは全校2位、生徒たちも最高の体育大会になったと嬉しそうでした。教員人生初めての体育大会は思わぬ形となりましたが、私にとっても忘れられない最高の体育大会になりました。



76 会話ができた

「高校で元気にやっています。」

声に出しての会話ができるのは、今年に入ってからだった。このような会話ができるのは、当たり前のようにも思えるが、私にとってはとても感動的な出来事だった。

この生徒との出会いは、今から数年前の入学式のとき。当時1年生として本校に入学してきたこの生徒は、とても緊張していた。周りの生徒も、新しい環境に進むため、他の小学校の人たちや新しい先生たちとの出会いがあり緊張している様子だった。もちろんこの生徒も同様であった。ただ違うことは、この生徒は緘黙という特性をもちあわせていたことだった。1年生のときは、私は交流学級の担任として関わった。様々な授業や行事をクラスのメンバーの1人として一緒に活動した。しかし、直接声に出しての会話はできなかった。この生徒が3年生になったとき、縁があり、私がクラスの担任をすることになった。4月から人間関係を再度築いていき、年度末が近づいていく中で、何度か「声が聞きたいな～」とアプローチを試みたが、結局、卒業式の日も声に出しての会話はできなかった。

今年度に入っても、新型コロナウイルスの関係で学校は休校になっていた。そんな中ある日、職員室にこの生徒が突如現れた。大勢の職員がおり、全員が注目している中、この生徒は1人で話し出した。

「高校で元気にやっています。」

最初にか細く小さな声だったが、確かに話し出したのだ。その瞬間私は感動し、こみ上げてくるものがあった。何年も人と声を出して会話をするのができなかったこの生徒が、それを乗り越えたのだ。まるで奇跡を見ているようだった。

その後も、この生徒から何度か連絡が来た。

「高校で新しい友達ができました！」

や、

「マラソン大会、最後まで走りきりましたよ！」

ということを知った。その度に嬉しさがあつた。

この生徒のとても大きな成長のほんの一部でも支援することができ、私は教師になってよかったと感じた。



77 『本気だったからこそあふれた思い』

本校の体育祭において、「長縄跳び」という競技で学校内上位に入るということは、モチベーションを保つ上で大きなウエイトを占めている。我が3年2組の生徒たちは、休み時間になると隣のクラスの生徒と長縄の最高記録について話題で持ちきりになり、最高記録が出ると

「先生！長縄最高記録更新したよ！」

と満面の笑みで報告をしてくれる。生徒たちが一生懸命な姿で取り組むことはもちろん、記録更新をするために仲間と声を掛け合い励ましあう姿がなによりまぶしい。

そんな彼らが迎えた、体育祭当日。1回、また1回と回数を積み重ね、2週間の練習期間で残した120回という最高記録を更新すると、さらに記録を伸ばしていく。

「まだまだ跳ぶよ！」

「最後まで！」

「みんなで声を掛け合って頑張ろう！」

さまざまな声が飛び交う中、生徒に声をかける私の手にも思わず力が入る。隣のクラスも回数を重ね、いよいよ最後まで跳び続けたクラスの勝ちだ。そんな思いがよぎった時、2組の縄が止まった。

結果は練習の記録を大幅に上回る196回。学年で2位になったものの、跳び終わってすぐに涙を流す生徒の姿がそこにはあった。

体育祭が終わって生徒から涙の理由を聞くと、

「負けてしまったのはもちろん悔しかったけれど、本気でぶつかって自分たちの最高記録を出して負けたのだから仕方がない。それよりも、みんなで声を出して跳び続けた楽しかった長縄が終わるのが寂しくて涙が出た。終わってほしくないと思った。」

と話す生徒がいた。翌日の日記には、体育祭の長縄が最高に楽しかった。という言葉がいくつも並んでいた。

本当に生徒たちは自分の想像を何段階も超えてくるのだと感動し、同時にそういう場を担任という一番近いところで経験できたことを本当にうれしく思った。

「教師になってよかった」と感じた瞬間エピソード



【先輩・同僚教師との関わり編】

78 子どももかわいいですが・・・。

子どもたちとのエピソードもたくさんありますが、私が教師になってよかったと感じた瞬間は、先生方との出会いです。先輩や同僚、時には後輩も、困った時には自分の仕事を後回しにして手伝ってくれました。どの職場でもそうかもしれませんが、教職員の親切度は高いと思います。私が若い頃、体育主任を任されるが多かったのですが、運動会、陸上大会、マラソン大会や縄跳び大会などの準備で大変な時に、ライン引き、テント張りやカード作りなど、約束もしていないのに、どこからともなく現れて手伝ってくれるのです。本当に感謝、感謝でした。そんな先生方は、エネルギーで明るくて楽しい方が多いです。そして、基本的に皆さん真面目です。(公務員ですから当然と言えば当然ですが)とにかく、たくさんの先生方に助けていただき、今の私があることは確かです。本当はお世話になった先生方のお名前を出したいぐらいです。

教員を目指す皆さん。子どももかわいいですが、学校には助けてくれる先輩の先生がたくさんいます。是非、教職を目指して頑張ってください。

79 教務主任の後押し

平成12年。総合の本格実施を控えた年。総合試行の研究発表を迎えた。総合の素材選びから始まり、1年間の構想を作る。一昨年米を売る活動ができなかったことが頭をよぎる。稲作を素材にするか、福祉を素材にするか悩んでいるとき、当時の教務主任の一言で吹っ切れた。「自分が一番やりたいことやればいいじゃん」

心のどこかでくすぶっていた稲作を素材にした実践をやりたい。自分たちの作った米の可能性を広げる実践にしたい。出来上がった単元が「おいし稲、うれし稲、たのし稲」子どもたちも生き生き活動した。教務主任の後押ししてくれた言葉がなければ、2度目の後悔をするところだった。



80 先生方との出会い

教師になって一年目。初めての担任。四月の懇談会后、廊下から聞こえてきた「今年は貧乏くじを引いたね。」という保護者の声。悔しくて涙が止まらなかったあの日から十五年。今も、私が教師という仕事をやり続けることができているのは、先生方との出会いがあったからだ。

一校目。「あなたが思うようにやればいい。責任は私がとるから。」と言ってくれた学年主任の先生。

二校目。「あなたが笑顔で子どもたちの前に立つことが一番大切。そのために行えることがあればやるよ。」と言ってくれた先輩の先生。

三校目。「十六年前からあなたのファンでした。」という教え子からの言葉。初めて同じ職場で教え子と働くことができた三年間は、(若い時の自分も間違っていなかった。教師としてより自分を高めよう。)と思うことができた。

四校目。新しい分掌につき、前任の先生と自分を比べて、焦り、力量不足に苦しむ私に「あなたはあなたのやり方で、あなたの良さを発揮すればいい。」と言ってくれた教頭先生。

どの学校に行っても、自分の一生の宝物となる先生方との出会いがある。自分を支えてくれる先生がいる。自分の好きなこと、得意なことを発揮できる場がある。自分を認めてくれる先生がいる。同じ方向に向かって励まし合える仲間がいる。

そして、研修等で私が小学生中学生だった時の先生方に会ると、「活躍していることを耳にするよ。うれしいよ。」と喜んでいただける。私に教師になりたいと思わせてくれた恩師に再会するたびに、尊敬する恩師と同じ仕事ができている自分を誇りに思う。

「教師になってよかった。」心からそう思う。



81 きっといいこと・・・あります

私自身、40歳をこえるまで、小学校でお世話になった先生方と、お目にかかれなくなるまで、手紙などで交流させてもらっていました。ずっとずっと私にとっては先生でした。

私が先生になったとき、

「大変な時代に先生になるけど、きっといいことがあるよ。」

と励ましていただきました。

目の前の生徒は一人一人個性があり、キラキラしていて、あっという間に本当にかわいい存在になります。日々の生活はもちろん楽しいことばかりではありませんが、でもでも、笑いじわができるほど一緒に笑い、うれしくて泣き、悔しくて泣き、生徒たちから学び、成長する自分がいます。

日々の生活の中や卒業生となった教え子たちから言葉をもらうたびに、「きっといいことあるよ」と励ましてくださった恩師の言葉を思い出し、教師となつてがんばってきてよかったなと思うなんともいえない充実感を感じます。

82 仕事を通しての繋がり

教師になって良かったと思うことは、生徒たちとのふれあいだけではありません。同僚の先生たちとの、仕事を通しての繋がりも素敵だと思います。

先輩教師からは、貴重な体験談や教科指導、生徒指導のアドバイスを教えていただき、同僚や後輩教師とは、教育について熱く語り合う。そんな、子どもたちの成長を、仲間たちと喜び、困ったことがあれば助け合う職員室も、わたしは教師という仕事の魅力のひとつだと思います。

「教師になってよかった」と感じた瞬間エピソード

【保護者との関わり編】

83 夏の面談で

「子どもたちの保護者の方たちと何を話そう。保護者の方たちと話すのって怖いなあ。」

4月から始まった教員生活。今年度は新型コロナウイルスのこともあり、保護者の方と直接話す初めての機会が夏の面談だった。初任者の私に子どもを任せるのはすごく不安だろうな、何か言われるかもしれないな。授業も学級経営もうまくいっていないし。などと考え始めると、夏の面談が始まるのがどんどん不安になっていった。しかし、その面談の中で、数人のお母さんから

「子どもが2年生になって、学校に楽しそうに行っています。」

「先生のことが大好きみたいで、先生とのことをよく話してくれます。」

と言っていた。今までの自分のやり方や接し方が間違っていたわけではなかったのだと実感でき、嬉しい気持ちでいっぱいになった。それと同時に、子どもたちのためにできることを精一杯やろうという気持ちになった。

84 思いが届いたと感じた時

2校目。大きな学校から単級の学校に異動し、学級のことを全て自分で決め、行っていかなければならない日々。分掌も多く、自分の子にも手がかかり、(自分はできているのだろうか。)と悩んでいたときに、保護者から手紙をもらいました。

「あまり学校のことを話さない子ですが、先生の話はよくしてくれます。娘に先生のことを尋ねると、『先生はお母さんよりお母さんなんだよ。』という答えが返ってきました。娘は本当に先生のことを信頼し、先生がいたことで安心したのだと思います。学校の様子は親にはわかりません。そんな中、先生がいてくださったことを嬉しく思っています。本当にありがとうございました。」

私はこの子のためにどうしたら一番いいのだろうと、できる限り長いスパンで考え、指導したいと考えています。それが伝わっていたと感じられた時でした。これからも、子どもたちの未来のために、頑張っていこうと決意しました。



85 小さな変化を感じる喜び

これまで当たり前と思ってやってきたことが通用せず、むしろこれまでの自分のやり方に対して反省ばかりのスタートでした。

特に、思春期に入ってきていた A さんは、私のやり方に対して日々反発してばかり。A さんのお母さんも私のやり方にはなかなか納得してくれなくて、何度も何度も話をしました。

特別支援に関しては素人同然だったため、勉強しながらでしたが、子どもや保護者が不安にならないように、少しでも頼りにしてもらえる存在になれるように日々必死でした。

半年ほど経ったある朝、

「至急取り次いで！」

と私宛にかかってきた電話。何事かと思ったら A さんのお母さんからでした。電話に出ると、号泣しながら、

「A のことをぶってしまった。」

とのこと。よく聞くと、

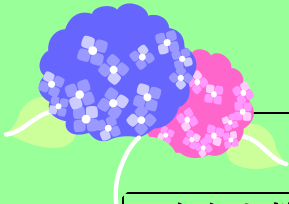
「A には難しいことやできないことがありそこを責めすぎてはいけないと思うようにしていたのに、イライラして激しく叱った上に手を出してしまった。」とうことでした。もちろんよいことではないと思います。でも A さんのために変わろうとしているお母さんを感じることができ、そしてそれを私に相談してきてくれたことが嬉しくてたまりませんでした。そんなお母さんの思いに触れ、私ももっともっと A さんに寄り添い、頑張ろうと思いました。お母さんと一緒に、A さんとたくさん向き合っていこうと思います。

86 本読みカードの言葉

「先生のおかげで、学校が楽しいって言うんですよ。」
そんな言葉がある日、本読みカードに書かれていました。

わたしは、子どもたちと授業をしたり遊んだりできることが、とても楽しいと感じています。子どもたちと楽しく過ごし、笑顔で接するように心がけている私にとって、子どもたちの親である保護者の方からのそんな言葉は、とても嬉しいものでした。

保護者の方からの言葉は、私の教師としての支えになっていることがとても多く、温かい言葉をいただくたびに、「教師になってよかった。」と思うのです。



87 1つ1つの出会いに感謝

何年も教師をしていると、知り合いのお子さんの担任になることがあります。中学生・高校生の頃と同級生であったり、先輩であったり……。後から、知り合いのお子さんの先生になったことを知り、お互い、驚いたこともしばしば。

しかし、その年の出会いは、自分の中でもひっくり返りそうな驚きが待っていました。新1年生の入学説明会で、あるお母さんから「私のこと、覚えていますか。」と声をかけられました。それは、自分が新卒だった頃、初めて担任をした4年生、当時10歳だった女の子が、母親として説明会に来たのです。昔の面影がやや残っているものの、結婚して名字も変わり、1年生の娘さんと一緒にいる姿は立派なお母さんでした。時が経つのは早いものだと痛感しました。

翌年、娘さんの担任になり、会って話す機会が増えました。あの、かわいらしかった子が成長し、お母さんになったということも感動的でした。そしてこの、1年生のお嬢さんも、成長し、お母さんになっていくことでしょう。1人1人の人生があり、そして1つ1つの出会いに感謝してこれからも歩んでいこうと思います。

88 保護者の言葉

教員生活6年目の春。島田の小規模校に勤めて3年。4年生を担当した。

始業式の日、玄関で子どもを待つ。その子は右足が半分ないのだ。3年生の時交通事故で失った。その彼を受け持つことになった。名前は藤本怜央、現在車椅子バスケット全日本のエース。そんな彼も当時は普通の小学生。保護者の意向で、「足が片方ないだけで、後は普通の小学生として扱ってほしい、ただ助けが必要な時は手を貸してほしい」

と言われた。成長過程にある体のため、痛みが伴う。倒れると危険なため2階にある教室までの上り下りは毎日オンブした。それ以外は他の子と同様、叱るときはしかり、笑うときは笑う、そんな日常の繰り返し。

1年が過ぎ、学校を離れるときがきた。怜央君の保護者から、

「先生でよかった。先生だから任せられた。」

と言われた。怜央君を中心に学級づくりをしようと始めた4月。子どもたちと時に笑い、時に涙する日常を精一杯彼らのためにやろうと決めたことがお父さんの言葉として返ってきたことが何より嬉しかった。



89 思いは伝わる

「うちの子、先生のクラスでうれしいって言ってます。」

「先生がすごく丁寧に見てくれていたことがありがたいです。」

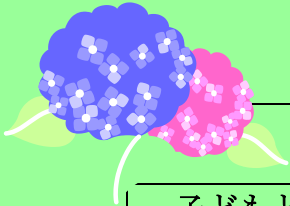
子どもたちから言われる言葉もうれしいが、保護者からのこのような一言に頑張っていてよかったなど感じる。それは、家で子どもたちが学校のことを話題としており、「楽しい」ということを伝えている証だからである。

日々の学校生活の中では様々なことが起こる。楽しいこともあればつらいこと、苦しいこともある。授業を投げ出したくなることもある。

子どもたちは素直だから、楽しいときには笑顔になり、つまらないときはうつむく。素直な子どもたちだからこそ、授業をはじめ日々の学校生活の中で教師自身の熱い思いを伝えていくうちに、少しずつ子どもたちにも思いは伝わっていく。どのような時でも情熱をもち、子どもたちに真剣に向き合えば必ず思いは伝わると思う。そして、その思いは保護者にも伝わっていくのだと思う。

一回楽しい授業をやったぐらいでは変わらない。毎日毎日積み重ねていくことで、次第に教師の思いが子どもたちに蓄積され、保護者にも波及していく。時間がかかる。だから、担任が変わってから私の思いに気付かれることもある。しかし、自分自身が間違っていなかったのだと確信できうれしくなる。

今年はコロナ禍で、様々な変化のあった年であった。これからも何が起こるか分からないが、目の前の子どもたちの幸せを願い、情熱をもって子どもたちに向かっていきたい。



90 励まし合って子どもに寄り添う

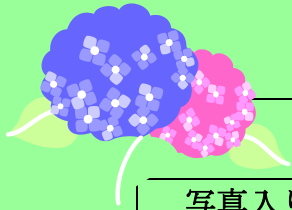
子どもと過ごす1年間、日々様々な場面に遭遇し、喜怒哀楽に満ちた時間を過ごしています。特に、特別支援学級の担任になったある年のこと。自分の気持ちを抑えられず号泣し、学校に来てはクラスには入れない子。この子と授業し、1年を乗り越えていくためにどうしたらいいのかと、毎日あれこれ考え、思い悩みました。

この子が1番好きな算数で、楽しさを前面に出した授業を考え、お母さんにもヒントを貰いながら、何を組み込むと学習に引き込めるのかを考えた日々。「やってみようかな。」と思ってくれそうな内容を考えては失敗し、また再考。私も保護者も悩みながら、励まし合って悪戦苦闘したことを覚えています。この子が教室へ入り始めたのは、算数の授業がきっかけとなりました。

年度末にお母さんからいただいた嬉しい手紙。

「親として毎日必死で学校へ行かせようと戦い続けてきました。何度も失敗し、親子で喧嘩することが当たり前の毎日でした。子どもが学校へ行くと自分から言ってくれた日は、すぐには信じられませんでした。子どもが学校へ行き始めたのは、算数が楽しいからだそうです。やっぱり勉強が楽しいって、大きな自信に繋がるんだなと思いました。先生と一緒に色々計画したことが実を結んだと思うと、あの時の苦労が今では大きな喜びです。ありがとうございました。」

子どもが変わっていくまでの長い時間、保護者や職場の仲間と励まし合うことが大きな支えとなり、日々の原動力となりました。大変さが色濃い特別支援学級。しかし、特別支援学級の担任を経て、子どもに本気で付き合うことを理解し、そこから得られるものの大きさを実感できたことは、教師人生において大変貴重な経験でした。特別支援学級ならではのいい思い出です。



91 保護者からの手紙

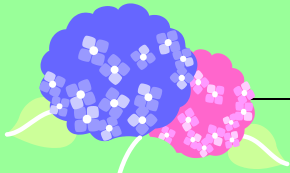
写真入りの学級便り、とても楽しみでした。

お便りを見ながら、まるで“ウォーリーを探せ”のように、我が子の写真や名前を探したり、学校であったできごとを知ったりして、子どもとの会話も弾みました。行事ごとに少しずつ成長していく姿を、お便りを通して感じることができてよかったです。製本も記念になります。本当にありがとうございました。〇〇（*保護者名）

新規採用の年から、担任を持つと毎回、学級通信を発行してきました。週に1回、その週にあった行事や授業のことを、子どもたちの書いた文章や写真を入れながら、A4サイズの紙裏表1枚にまとめ、家庭へと配付してきました。

1年間でおおよそ40枚の学級通信。そこには、受け持った子どもたちの歩みと確かな成長が綴られています。そして、3月の終わりには、それらを集め、製本し、家庭へとプレゼントしてきました。

そして1年が終わる頃になると、毎年1枚か2枚ほどですが、保護者の方からの感謝の手紙が届きます。学級通信を毎週毎週書くのは結構しんどいですが、そんな保護者からの手紙を読むと、苦勞が報われた気持ちになり、教師になってよかったと感じます。



92 いいところ見つけ

小学校の教師になり、もう少しで二年が経とうとしています。嬉しいことや辛いこと、様々な経験をしました。その中で、私が教師になってよかったと心から思えたのは、保護者の方からのお言葉です。私は、毎朝「先生のいいところ見つけ」という題名で、子どもたちがしていた素敵なことを板書するようにしました。子どもたちは他の子どもたちのいいところをじっくりと読み、「すてきだね。」や、「ぼくもまねしてみよう。」と、意気込んでいる姿が見られました。私はそのような姿がとても眩しく感じ、前よりもっと子どもたちのことが大好きになりました。そのことも十分嬉しく感じましたが、面談の際に、保護者の方から

「子どもたちのいいところを見つけていただき、本当にありがとうございます。

おかげさまで私の子も、ぐんぐん成長しています。」

と、嬉しいお言葉をかけていただきました。自分がやってきたことが、子どもたちだけではなく、保護者にも認められていたことがとても嬉しく感じました。これからも、自分が今やっていることを信じ、目の前にいる子どもたちが成長するためにはどんなことができるのか、学校が目指す子どもたちにするためにはどのような手立てが必要か考え、取り組んでいきたいと思います。教師はとてもやりがいがある職業であるということを、この二年間で改めて実感することができました。



あとがき

教師と子ども、教師同士、教師と保護者……。人と人、心と心の関わりを通じたエピソードが集まりました。全てのエピソードに見え隠れする思い。それは、みんなが「子どもの成長」を願っているということ。教師はその「子どもの成長」を、間近で感じるができる職業だということができると思います。

また、苦しいことを乗り越えたその先にも、たくさんの「やりがい」があります。だからこそ、「また明日も頑張るぞ!!」という思いが広がっていくのだと思います。頑張る先生方の思いで、素敵なエピソード集となりました。

最後に1つ紹介をさせてください。エピソードに登場する「藤本怜央」選手に、名前の掲載許可を得るため連絡をしました。すると事務所を通じて、こんなお返事をいただきました。

「人生で1番お世話になった先生です。ぜひ名前使ってください。」

こんな素敵な出会いが、あなたを待っているかもしれません。

「かけがわ教育の日」特別企画
「教師になってよかった」
と感じた瞬間エピソード集

発行 令和3年1月

発行者 「かけがわ教育の日」実行委員会

編集 掛川市教育委員会 教育政策課

〒436-8650 掛川市長谷一丁目1-1

TEL 0537-21-1109

FAX 0537-21-1222

Email gaku-somu@city.kakegawa.shizuoka.jp